
素直な心で

櫻塚森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直な心で

【Nコード】

N2599U

【作者名】

櫻塚森

【あらすじ】

報われない愛だと気付いた時、彼女は愛する人から離れて暮すことを選び、コレが愛だと確信していた彼は、彼女の心が掴めないまま時を逸していた。シリアスになりすぎないように頑張ろうというお話です。警告タグについては悩みましたが、一応、この通りに行ってみました。

序章

「エヴァンローズ…。」
低く響く声。

懐かしさに心が揺さぶられるのを感じた。

しかし、エヴァはグツと足に力を入れて相手を見据えた。

ここで、甘い顔をしてはいけない。

私には守るものがある。

新しい職場。

その職場の理事に彼が名を連ねているなんて、知った時は、情報収集の甘さに唇を噛みそうになった。

エヴァは学園の理事の一人である彼といずれ顔を合わすのだろうとは思っていたが、こんなにも早く呼び出されるとは。

他にも理事がいるくせに、彼ほど忙しいそうな理事はいないだろうに。

なんと悪態を心の中でついたとしても後には引けなかった。

ドアをノックして入った彼女に対し、彼が新しくきた教師になど興味はなかったのが伺えた。

彼は何気なく顔を上げて、正面の扉に目をやり、入ってきた彼女を見て何を思ったのだろうか。

エヴァは、この学園に転職するにあたり理事の方々には会わなくていいと聞いていた。

子供たちのために進められた転校。転職。

こんな皮肉なことはあるのだろうか。

エヴァはため息を吐いた。

この学園には5人の理事が居る。彼よりもっと学園の運営に対して熱心な人もいるだろう。なのに、彼は新しい教師がきたと知るや学園を訪れた。

昔から仕事には誠実な彼は弁護士であると共にアイザック伯爵家の次期当主としても誠実であろうとしているのだろう。

それとも、新しく雇われた教師の名前を見て慌てたのだろうか。

(まさか……)

あの時、エヴァとお腹に宿る子供達にはっきりと拒絶を示したのは彼の方だった。

「お久しぶりです。」

そう発した彼女の顔に彼は複雑な顔を見せた。

「名前を見ても、君であるはずがないと思ったが……。」

懐かしい彼の声。

声を聴いただけで愛していた過去が蘇りエヴァは心が痛くなった。そして、そんな自分を呪っていた。

つづく

過去「1」

エヴァの両親はアイザック伯爵家に雇われていた。

身分など気にしない伯爵は自分の子供達とエヴァが仲良くなっても何も言わなかった。

気にしてたのは彼女の両親の方で、特に子供達の家庭教師であった母親のマグリットはよい顔をせず成長するに従ってその度合いは強くなった。

女の子供がいなかったアイザック伯爵家の夫人は身分が違うとマグリットが何回も言ったが、逆に何時の時代の話だと笑ってマグリットの考えを払いのけた。

夫人にとつて、マグリットは大切な幼馴染である。

身分が違うと引き気味の彼女に泣きながら友達になつてと頼んだのは小学校の頃だ。

出会った時から夫人はマグリットの優しさと聡明さに憧れを抱き、大好きだと公言していた。

マグリットの両親は、スワローテイル伯爵令嬢である幼い頃の夫人の涙には弱くマグリットを常に側に置くと約束することで泣き止ませた。

お互いに惹かれあい、親友となつても世間の目は冷たく、マグリットは嫌味や陰險な悪戯をしてくる人達と影ながら戦っていた。

彼女を通じて、令嬢に近付こうとする男に騙されて痛い目にあつたこともあった。

そんな過去もあり、娘には平穏な生活を送って欲しかった。

ましてや夫人の子供は男の子である。

夫人のことも結婚した先のアイザック家の当主も良い人だと分かっているし、信じているが、何か間違いがあつて、責められるのはこちらだとも思っていた。

娘に辛い思いをさせたくなかった。

しかし、そんなマグリットの気持ちを探しながら、馬鹿馬鹿しいと考えていた夫人は、幼馴染みの親友であるマグリットの娘エヴァを、将来的に長男のアスランと彼女が結婚すれば嬉しいとさえ思っていた。

アスランは彼女にとって優しい同じ年でありながら、兄のような存在で、何故母の言うように仲良くしてはいけないのか分からなかった。

エヴァは頭の良い子だった。

アスランも良く出来る子供だったが、それ以上にエヴァは知能が高く、都会でよい教育を受けるべきだとマグリットと夫は、伯爵夫妻に説得され、エヴァは伯爵家に居候することになった。

しかし、夫人の計らいで同じ学校に通うようになって彼が自分とは違う世界の住人だと分かってきた。

一緒にいることで随分とイヤミや悪口を言われた。

良家の令嬢や令息と言われる人達に突き飛ばされたこともあった。

怪我を負って帰ってきたことにアスランが気付くと、それ以来彼らは何も仕掛けてこなくなった。

アスランは自分を守ってくれているとエヴァは嬉しかった。

けど、彼が優しいのは誰に対しても変わらない。

嫌われてはいないが、好かれているかは謎だった。

自分が彼にとってどういう存在であるのか悩みはじめたエヴァだったが、教師を目指すという自分の夢は揺らぐことはなかった。

エヴァが初めての恋心に気付いた時、アスランには将来弁護士になると言う同じ目標を持つ仲間達がいた。

アイザック伯爵曰く、“子供の集まりではあるが油断すると年若い弁護士など痛い目に合うだろう。”と言うほどに頭のよい、集団だった。

アスランと違って若者らしい表情を見せる彼らはエヴァにも優しかったが、紅一点のリサだけはいつも目が笑っておらず時々居候中のエヴァの部屋に来てはアスランがどれだけ優しく自分に接してくれるのか、将来を楽しみにしていることを述べていった。

リサは由緒正しい貴族の娘で頭も良く、人の輪の中心にいる目立つ存在だ。

野心家である彼女は弁護士という職業に興味はなかったが、ジュニアハイスクール時代に家で開かれた晩餐会でアスランを見てから彼ほど自分にふさわしい相手はいないと考えていた。

彼女の父親もアイザック伯爵家の後継者なら申し分ないと判断した。彼を手に入れるため、望んだ未来を手に入れるためにアスラン達の仲間に入ったのだ。

幸いにもその中には幼馴染みが居たため入りやすかったのだ。

しかし、その輪の中に入りはしないが、アスランの側には邪魔なエヴァがいた。

聞くところによると貴族でも、資産家の娘でもなかった。

ただ頭の良い、勉強しかしたことない、面白みにかける女。

しかも、アイザック家に居候しており、夫人に気に入られているという。

リサは、エヴァを排除するためなら何だってするつもりだった。

つづく

過去「2」

リサとアスランが恋人同士だと知ったのは大学に入る前だった。彼女が伯爵家に来た際に嬉しそうに告げに来たのだ。

付き合ってくれ、結婚も考えてるって言ってくれたと。

真面目で誠実な彼が嘘は言わないだろうと、リサに“おめでとう”と言った。

「でも、まだ内緒よ。アスランってば照れ屋だから。大学生にもなっていないのに、伴侶を決めるってニコラスとかが聞いたら、馬鹿にしそうじゃない？だから、黙ってて。でも、エヴァは、私の相談に乗ってね。」

失恋したと言うのにあまり辛くなかった。

始めから諦めていたからかなと彼女は思った。

アスランは高校最後のプロムパーティーにエヴァを誘った。

青天の霹靂。

エヴァは信じられなかった。

「リサは知ってるの？」

そう聞いたエヴァにアスランは答えた。

「・・・？もちろん、知っているが・・・。」

しかも、リサも知っているとのことと驚いた。

進む大学は一緒だが、彼とは所詮は幼馴染。

これ以上の思い出作りはないだろう、リサが気を利かせてくれたんだと思った。

誰にも誘われないだろう彼女を救ったつもりだったのだろう。

後で夫人からも頼まれたのだと知った時は、やはりと言う気持ちと
思った以上に期待していた分、自己嫌悪に陥ったエヴァであった。

パーティーではリサもアスランといたのに、サッカー部のエースと

一緒にいて楽しそうだった。
なんだか嫌味も言われたけど、彼女が楽しそうだったからとホツとして、アスランと一緒にいられたことを純粹に喜んでいた。
(本当、いい思い出になった。うん、皆、優しい。)

パーティの帰り道、車の中でアスランは何時まで経っても屋敷への道の途中で車を止めたまま動かなかった。

「アスラン？どうしたの……。やっぱり、後悔した？私なんかと一緒に行って。」

「ああ……。後悔した。」

エヴァの心に針が刺さる。

すっと車窓へと目をやったエヴァはアスランに抱きしめられた。

「ア、アスラン？」

突然のことに驚きを隠せない。

彼の手がエヴァの頬にアスランの手が触れて向かう合図。

綺麗な青い瞳が暗がりの中にも光っているのを知った。

「君が欲しいんだ。エヴァ……。」

逆らうことなんかエヴァには出来なかった。

プロムから数日後、エヴァはリサに呼び出されていた。

「私、アスランを許そうと思って。」

最初の言葉がそれだった。

「プロムのことよ。アスラン怒ってたから、私が彼を無視してトビを誘ったこと。次の日、彼ったら謝りに家まで来てくれたの。愛してるのは私だけだって言ってくれたわ。ごめんね、エヴァ……。バージン捧げた相手が彼で。でも分かるでしょ？貴方と彼じゃつりあわないって。貴方は田舎で子供相手に教鞭とってる方がお似合いですよ？」

初めてを捧げた日の朝、彼はベッドに居なかった。

彼にとって、自分の存在と言うものは、こんな程度の存在なのだと思っただ。

好きとも、愛しているとも言ってもらった記憶がないことに今更ながら気付いたエヴァは、自分の血で汚してしまった彼のベッドのシーツを剥ぎ取り、新しいシーツを敷いた。

それでも、彼は誠実な人だ。

だから、きつと何か用事があつて私を一人にしたんだと都合のいい事を思っていたことに気付いた。

痛む体を引き摺るように部屋を出て自分の部屋へと向かう。

嬉しいと思う気持ちと悲しくて辛いと思う気持ちがごちゃ混ぜでエヴァは深い眠りを必要としていた。

だから、耳栓をして、部屋の鍵を閉めた。

今日という日は誰にも会いたくなかった。

睡魔に襲われながらもベッドの中で考えた。

居候しているため、いつか彼と顔を合わせなくてはならない。

その時自分はどんな顔をすればいいのだろうか。

でも、結局彼とは顔を合わせていない。

(こんなもんだ、私の存在なんて。)

そう思つて、エヴァは自嘲した。

目の前にいる人が語る真実に胸は張り裂けた。

自分を抱いたその足で、実際はリサの元に行き、彼女を抱いたんだろう。

血が流れていた。

(泣いてやるもんか。)

リサからアスランの優しさについて、自分の寛容さについて語られた時、エヴァは、どれほどの惨めさが自分を襲っているのかを自覚した。

奨学金とアスランへの思いだけで大学を選んだことを後悔しない日

はなかった。

アイザック伯爵家での居候を止めて寮に入ると決めた時も、アスランは何も言わなかった。

それが答えなのだと言った。

その頃には田舎に帰って生活をしてきたマグリットも娘の寮生活を応援してくれていた。

彼女はエヴァのアスランに対する気持ちを知っていただけに、リサという相手のいる彼に思いを寄せる娘が不憫だった。

だから、彼女が伯爵家から出て寮生活をすると言った時は、ホッとしたものだった。

学部の違う彼達は会う機会もめっきり減ってしまっていた。

リサだけは相変わらず自分とアスランのノロケ話と婚約が間近に迫っていることをエヴァに教えていた。

先日、夫人からお茶や食事に誘われた時にアスランが家を出て仲間達だけで生活を始めたことを知らされた。

時々あるこのお誘いで、もし自分とばかり会ってしまったらリサが気にすると思っていて、家を出たのではないだろうか、そして、

仲間達と言っても結局はリサと暮らしていると云うだけなのだろう、エヴァは溜め息を漏らした。

つづく

過去「3」

「ねえ、エヴァ？」

かけられた声に我に返る。

お茶会の真つ最中だった。

彼女の側には小さな天使が子守とままごとをして遊んでいる。

生まれた子はアイザック家の特徴と言っていていい銀髪だった。家族にとって待望の女の子だ。

それなのに、彼女は未だにエヴァを誘ってくれていた。

「はい、奥さま。」

アイザック伯爵夫人は彼女達一家に奥さまと呼ばれることをよしとしなかった。

しかし、考え事をしていたエヴァはそれに気付いていなかった。

「…まあいいわ。あなた、アスランとは連絡とってる？」

夫人の言葉に首を傾げる。

連絡など取る間柄ではない。

「やっぱり…あの子ったら！」

夫人のイライラした声の原因が彼女には分からない。

「あの〜アスランとは学部が違いますし、アメリカに留学するって言う噂も知ってます。」

あっさりとエヴァは答えた。

彼は勉学のため仲間と一緒にアメリカの大学に留学するらしい。

「噂でしか聞いてないの？アスランのこと…。」

アスランとリサの婚約のことだろうか。

自分から言葉に出すことには躊躇ってしまう彼女。

「はい、あ、リサとの婚約のこと聞きました。おめでと〜いづいませ。」

「えっ！」

夫人の驚く顔にエヴァはハツとして謝った。

大学に入り、忙しさに発車がかかった頃、リサが嬉しそうな声を上げて抱きついてきた。

プロポーズされたのだと。

「あ、まだ公表されてないことでしたか。すみません。」

「・・・それは誰に聞いたの？」

夫人の厳しい目に本当軽々しく口に出しては駄目なことだったんだと悟った。

「リサが…とても仲がいいみたいですね、よくノロケられます。あのアスランが甘い言葉を言っているのは想像できませんけど…。」とぼけた表情で取り繕う。

「エヴァ、貴方・・・リサさんの言葉を…いえ、アスランは何も言っていないの？」

夫人は私の気持ちを知っているはずだ。

けれど、アスランと私がそんな関係ではない事だつて…。

「ええ…昔からアスランは私には優しくかったですけどあまり喋ってくれる方ではありませんでしたから。ホントよいお兄さんって感じだ。」

“私なんか恋愛対象にはなりえない。私を抱いて失望したんだろう。リサの良さを確認したかっただけ。”

そう言いかけて彼女は口を閉ざした。

すると夫人が急に話題を変えた。

「エヴァはおつきあいしてる方はいるのかしら？」

怒っているような夫人に首を傾げる。

最近エヴァは同じ学部に通うグレッグと親しくしていた。

アスランといる時のような胸のトキメキや痛みはなく友達と言う雰囲気だが、たぶん周りから見るとお似合いの二人なんだろう。

リサにも彼とのことをけしかけられた。

「たぶん…そうなるにふさわしい相手なら、近いうちに…出来るかもです。」

きつとアスランほど好きにはならない。

グレッグには失礼かもしれないけど、彼を忘れるためなら、誰でもよかった。

その相手が彼なら、マシなほうだろう。

「ま、まあそうなの？ そう言えばアスランは貴方とどうやって連絡を取ってるのかしら、このお茶会のことだって、寮に電話があったの？」

バッグの中には、彼から来た連絡を書き取ったメモがあった。

一方的な連絡方法だが、それで十分だった。

電話など自分からかけたことはなく、彼からもない。

「連絡は大学の掲示板で取り合ってます。今日のお茶会のことも書いてありました。」

「なっ！ 掲示板ですって！ ちょ、直接話はしてこないの？ あの子は！ エヴァのことが気がかりなはずよ、」

メモを開いてみても用件は大したことは書いてない。

「それで十分ですから。お互いに忙しい身ですし。でも、リサから本当はデートなんだって聞いてます。…奥さま？」

夫人は頭を押さえていた。

「いいえ、なんでもないので、ただ我が子ながら情けなくて…。」

エヴァは夫人の言ってる意味がわからなかった。

その話の後、夫人は少し席を外したが、直ぐ戻ってきた。

「また、ゆっくり話をしましょう。それから、マグリットにも会いたいわ。」

「はい、母に連絡しておきます。」

しばらくマグリットの話をした後、エヴァは伯爵家を後にした。

つづく

過去「4」

伯爵家の車に送ってもらって寮に帰った。

降り立つ前に運転手がアスランの姿に気付く。

エヴァは首を伸ばして彼を確認すると到着するなり慌てて降りた。

（本物だわ。）

寮の前にアスランがいたことに驚いていた。

「エヴァ、グレッグ・ノバクと付き合ってるって言うのは本当か？」

彼の勢いに退く。

「アスランには関係ないでしょ？・・・交際を申し込まれてはいるけど。」

彼は怒りを込めた目で彼女を見ていた。

「俺は……」

「もうすぐリサとアメリカでしょ？」

何故と言う顔を見せた彼にエヴァは苦笑する。

「リサ？彼女は関係ない、」

「嘘なんか言わなくていいの。彼女から何もかも聞いているから。」

とにかく、私が誰とどうなるうとアスランには関係ないわ。」

アスランの傷付いたような顔を見て彼女は硬直した。

彼は彼女の腕を掴み言った。

「俺は君のことが好きなんだ。今までだってこれからだって、俺は！」

アスランはエヴァを抱きしめた。

「嘘……」

「嘘じゃない。」

あの時抱きしめられて、彼女の思考は停止した。

彼に引つ張られるように向かった先は、彼が仲間達とシェアしているマンションだった。

「おかえり……って、誰？」

戸惑うエヴァも彼らも無視してアスランは部屋に入っていく。

「あ、あのお友達が・・・、一緒に居たのは彼女かしら？」

悪くなつた雰囲気を良くしようと話をする彼女にアスランは噛み付くようなキスをした。

彼の行動が分からなかった。

けれど、彼が何回も好きだ、愛してると言ってくれたことに心が騒いだ。

初めて結ばれた日から2回目も相手が彼だったことに正直エヴァは驚いていた。

リサはどうするの？

信じていいの？

彼女を抱きしめるように眠る彼の力が緩んだ隙についてその腕の中から逃れた。

落ちた服を拾い身につける。

恐る恐るドアを開けるとソコには数人の男達。

慌ててドアを閉めようとするエヴァに彼らの1人が声をかけた。

「ああ、隠れなくて良いよ。何、帰るの？」

またゆっくりとドアを開ける。

「アスランは、ノックアウト？」

「そりゃ、そうだる徹夜に次ぐ徹夜で、止めが夫人の言葉。そりゃキれるって。」

どははっと笑う、そんな間を抜けて帰ろうとするエヴァ。

「俺、ニコラス。よろしくね、エヴァちゃん。」

名前を知られててギョツとする。

「んな、驚かなくても・・・。ああ、おれトーマス。」

「アスランの姫に会えて嬉しいよ、でもさ、帰らない方がいいと思うけど・・・。」

エヴァは頭を振った。

「もうすぐ、留学なのでしょう？準備に忙しいとリサが言ってまし

た。か、彼女が来てしまつたら、大変だから、帰ります。」

皆の表情が戸惑っていることなど今の彼女には分からなかった。引き止める声があったが、エヴァは足早に出て行く。

「おい、アスランは？」

「だめだ、死んでる。」

皆が一樣にため息を吐いた。

「・・・リサのヤツ・・・何かしつこくね？エヴァちゃんに何か余計なことしてんじゃないのか？」

「トーマス、お前さ、幼馴染だろ？何とかしろよ。」

「俺はもう、知らん。あいつは手に負えん。彼女できそつだし。」
「魔性の女とも言えるリサが何を考えているのか未恐ろしいことだった。」

「っていうか、あと3日で出発なのに、アスランとエヴァちゃんは大丈夫なのか？」

心配する親友達の声はアスランにも、エヴァにも聞こえてこなかった。

つづく

過去「5」

マンションのエントランスでリサと会った。

派手ないでたちの彼女は、買い物帰りなのだろう、両手一杯の荷物を抱えていた。

「リサ……。」

こんなところで会ってしまおうとは。

エヴァは顔を伏せて、横を通り過ぎようとした。

しかし、リサは彼女の腕をひっぱり、自分の手荷物を下に落とすと、エヴァの顔を引き上げた。

「あ……。」

リサは紅潮していた頬や腫れぼったい唇をしたエヴァを見て逆上した。

「あ、あんたっ！人の男に手を出さないでよ！この、泥棒猫！」

思い切り頬を叩かれた。

「ご、ごめんなさいっ！私、私っ！」

痛みは、胸にも刺さっていた。

リサはもう一度エヴァの頬を叩いた。

「許さないわ、あんたを……。どれだけ私とアスランの仲を邪魔すれば気が済むの？高校の時か等ずっと、邪魔ばかり。いい加減にして！アスランにとって、あんたなんか、取るに足らない存在なの！お情けであの夜抱いてもらっておいで、まだ彼の優しさにつけこむなんて！最低よ！」

エヴァは自分の行為がリサをこれほどまでに傷つけていたことに今更ながら気付いた。

ひたすら謝ることしか出来ない。

そんな彼女の脳裏にはアスランが囁いてくれた愛の言葉も消えてしまっていた。

物凄い形相で睨まれながら彼女が吐く言葉は心に突き刺さっていく。

「いいこと、今後一切アスランに連絡なんか取らないで！彼は3日後にはアメリカに行くの！帰ってきた途端、卒業も決まってお父様の法律事務所に就職も決まっているの！もちろん、私だって、留学には付いていけないけど、就職先は同じよ！貴方に出る幕はないの！とつとと、田舎に帰りなさいっ！」

リサの怒りもつともだとエヴァは思った。

（心はリサにあるくせに、グレッグのことを知っただけで、・・・愛情のかけらもなかったじゃない！エヴァ、目を覚ますのっ！貴方はアスランなんか好きじゃないのっ！愛してなんかないんだから！）

それから3日間。

エヴァは友達の家を転々として寮には帰らなかった。徹底的に彼をさげ、伯爵家を避けた。

そして、アスランが留学したことを知ると大学のスキップ制度を用いて、大学を卒業した。

教師の資格も得たため、ロンドンを離れ田舎に帰ることにした。

彼女の進路は伯爵夫人も知らない間に決められたことで、夫人は後からマグリットからの連絡でエヴァがもうロンドンにいないこと、息子が徹底的な失敗をしてしまったことを知り、マグリットに心から謝った。

「いいんです、元々、あの子の片思いで・・・リサさんみたいな魅力的な人に敵うわけがないのに、教師以外の夢なんか持つから・・・」

「ちよつと、待ってマグリット・・・。」
マグリットは夫人の言葉も待たず、言いたいことを言うと電話を切った。

どんな理由であれアスランは娘を傷つけた男だ。
そう思うと夫人すら許せなくなっていた。

UJU

過去「6」

田舎に帰って、エヴァは幸運にも小さな小学校の教諭として働くことが出来た。

子供たちとの触れ合いは彼女の心の傷を癒したのだが、体の変化が現実を思い知らせてきた。

「妊娠……。」

体に宿った小さな命。

自分を弄んだアスランとの子供。

エヴァは、泣くことも忘れて働いて来たが、妊娠を知った時、涙を流してしまった。

父親から、妊娠したことをちゃんとアスランに告げるべきだ、責任を取らせるべきだと言われたが、エヴァには彼に拒否されるのが怖かった。

（墮胎しろって言われたらどうしよう……。）

たとえ弄ばれたのだとしても愛した人の子供だ、産みたかった。

結局エヴァはアスランに連絡をとることが出来ないまま臨月を迎えようとしていた。

そんなエヴァのもとに、リサが訪ねてきた。

彼女はリサの大きくなったお腹を見てギョツとした。

そして、エヴァは彼女の左の薬指に嵌った結婚指輪を見て改めて現実を知った。

「アスランの子なのね。」

「……ごめんなさい。リサ貴方を苦しめるつもりはないの。一人で産んで育てるから、」

リサは入れられた紅茶を一口飲んだ。

「アスランには？」

「知ってるでしょ？連絡なんてとってないわ。父さんも母さんも彼は知るべきだつて言うけど、アスランには迷惑なだけでしょうから。」

リサはため息を吐く。

「そうね・・・産む産まないのは貴方の自由よ、エヴァ。私ね、アスランに言われて貴方の様子を見に来たの。彼は優しいわね。」

ズキリと胸がまだ未練がましく痛む。

「妊娠のこと、産みたいってことは伝えておくわ。」

「・・・ごめんなさい。」

「いいのよ、誰にだつて過ちはあるわ。」

数日後、リサから封書が届いた。

そこには、驚くほどの金額が書かれた小切手とこれを期に一切の関りは持ちたくないというアスランのメッセージを記した手紙が添えられていた。

あれから3年。

生まれた子供は元気な双子の男の子だった。

エヴァにとって複雑なのは、2人ともアスランに良く似た銀髪に青い瞳だと言うことだけ。

生まれた子を見て、アイザック家に乗り込もうとした父を母と2人で止めた。

全て納得した上での別れだったと父には、もう一度説明した。

双子を抱えて生活をしていくことで、苦労もあるだろう、何故援助を頼まないとも言われた。

向こうにも責任はあるだろうとも。

けれど、エヴァはアスランに頼ることだけはしたくなかった。

この子供は自分だけの子だと。

大きくなって父親がいないことに疑問を持つだろう、そして会いたいと言われたら、正直に話すつもりだと言った。

父親にとって、エヴァは必要のない人間だったと。

だから、貴方達の父親には貴方たちは必要のない子供だと言われるだろう。

そんな辛い目に私は合わせたくない。けれど、母であるエヴァにとつてはかけがえのない愛すべき子供たちであると。

あの日、アスランから送られてきた小切手は未だ使われることなく閉まってある。

アイザック家に返還しようとも思ったが、こちらのことを知られるのもイヤだった。

つづく

過去から現在へ

身重で都会の男に捨てられて帰ってきたことが発覚したエヴァに村の人達は最初こそ冷たい目で見てきた。

しかし、教師として懸命に働き、子供達からの信頼も得ていたエヴァに対して、子育てなどあらゆる面で強力は惜しまないと言ってくれた。

田舎が似合うと何度も言われた自分が少しイヤだと思っていたのは、やはりアスランの隣に居たいという気持ちが強かったからなんだと彼女は思った。

この田舎で子供たちや両親、そして親切な村人達に囲まれて暮すのは幸せなことだと前向きに考えるようにした。

小学生に上がるうかと言う頃、イギリス全土で子供たちの学力、知能テストが行われた。

その結果、エヴァの子供たち、ルークとアーサーの知能指数が120を超えていることが分かった。

さすが、自分の子供だとエヴァは思ったが、国の教育機関から子供たちへは最高の教育を与えるべきだと打診があった時は正直悩んだ。子供達をノビノビと育てたいと思っていたエヴァだったが、村の人達皆が、国が援助してくれるなら都会で勉強をするのもいいのではと言ってきた。

子供達は愛する母親と一緒に暮せるならば何処でも言いと幼い割にしっかりとした意思表示を見せた。

ルークとアーサーは本当に頭がいい。

それは物心ついた時からエヴァが思っていたことだった。

親や祖父母の言うことを理解し、言葉を喋るのも普通より早かった。この聡明さは父親譲りかと思うと少し胸が痛むエヴァであった。

子供達が5歳の時、父親と言う存在が自分たちにはいないことへの疑問をエヴァに尋ねてきたことがあった。

理由を話すにはまだ早いとも思ったが、父親に必要とされていないとは言えなかった。

この天使のように可愛らしい子供たちをアスランは拒否したのだ。子供達は父親のことを話そうとする母親がとても辛そうで悲しそうな顔をしていることに気付いていた。

「母さんに、父さんのことを聞くのは止めよう。」

「うん、母さんにあんな顔させたくなかったのに……。」

2人の中でアスラン、父親に対するイメージは最悪なものだった。

自分達のために母さんがロンドンに行くことを決めた時、正直申し訳ないと思ったルーク。

「どうしてさ、ルーク。」

「だってさ……。ロンドンには父さんがいる。」
ハツとなるアーサー。

父親のことを母親に聞くことはあれ以来なかったが、母の昔話を祖母から聞く際に、どうしても言葉を詰まらせる時があり、それがアイザックと言う伯爵家に絡む話になった時だと察知した。

子供達は、母親が仕事で居ない時を見計らって、母親のクローゼットの中やアルバムなどを紐解いた。

その中で封印されたように紐で結ばれたアルバムがあるのに気付いた。

「これかな？」

「これだろ。」

アルバムの紐を丁寧に取り、開いた。

中に貼られている写真に写っていた大きい屋敷。

「母さん、可愛い。」

お転婆だったんだと思える写真がいくつもあった。

そして、同じ年頃の男の子と映っている写真。

それは、余りにも自分たちに似ていた。

「これだ……。」

「これだ……。」

写真を捲る。

何枚もその少年と少女であった母と一緒に映った写真があった。

少年はいたって無表情であったが、母を見る目は優しいものだった。段々と成長していく2人。

子供だった少年は、青年に、少女は娘へと変化していき、その距離感も広がっていった。

進学する度に映る2人の写真。

嬉しそうな母の顔。

「母さん、可愛い。」

「うん、可愛い。どうして、父さんは母さんを捨てたんだろう。」

到底子供の科白ではないが、彼らの知能は高かった。

ただ、大人の事情と言われると訳が分からなかったのだ。

「この女誰？」

父親にしなだれるように腕を絡めている女が映っていた。

端の方に一緒に映っている母の顔は悲しそうだった。

「父さんの相手だ。」

「……父さんの趣味が分からない。どうして母さんより、コレがいいの？」

ルークは立ち上がる。

「兎に角、ロンドンに行くことになった。いいか、アーサー、

」

「分かってるよ。母さんはボク達を守る。」

2人は腕を組む。

「父さんからも、この女からも。」

敵認定された父親と写真の女リサ。

息子達が新しい生活にそんな誓いを立てていることなどエヴァは知る由もなかった。

UJU

現在「1」

できるだけ無表情を取り繕う、貴方に会いに来たのではない、子供達を育てるお金を稼ぐためだ。

貴方から直接ではないにしろ、もらう気がしていやだったけど、生活がかかっている。

心の中で再度確認する。

子供達に最高の教育をと国が進めてきた学園。

その学園がアイザック家当主を理事としていたとは思ひもしなかった。

「この春から学園の教師として雇われてます。事務的な挨拶をする。」

「エヴァンローズ……。」
彼が腰を上げようとするのを言葉で遮る。

「国からの斡旋でこの学園にきました。貴方が理事だと知ったのは契約を交した後でした。気分は悪いと思いますが生活がかかってますのでご理解ください。」

気にしていないはずなのに、彼の薬指を確認してしまう自分がイヤだとエヴァは思った。

アスランの指には何もなかった。

（リサなら、指輪をしるといいそうなのに。）

「こ……子供がいるそうだな……幸せそうでよかった。」

今ひとつ要領を得ない彼の言葉にムカツとした顔を見せる。

「貴方には関係のないことですから、ここの理事さんは、一教師のプライベートに干渉するんですか？（売り言葉に買い言葉でもあるまいに……）」

エヴァは以前なら言い返すような性格ではなかったが、母となり強くなった。

それに、白々しい彼の言葉にも嫌気がさした。

どこまで自分を侮辱すれば気が済むのだろうか。

「いや、そんなつもりは・・・母が君の事を心配していた。大学を出てから音信普通になってしまったと。」

優しい伯爵夫人。

彼女のことも避けるようにロンドンを離れた。

あんなに優しくしてくれたのに・・・。

「母とは連絡を取っていたようですから、構わないと思ったんです。」

「

突き放す言い方。

それでいいとエヴァは思っていた。

再就職と共に引越してきた。

戻ってくるとは思って居なかった。

彼もリサのように、心の中では都会に馴染めない自分を笑っていたのだろうと思うと悲しくなった。

そして、何時からあんなことをされるまで恨まれるようになったのか。

誠実な人だと思った。

愛する人がいるのに、自分にまで手を出す人だとは思わなかった。

何度も考えたが結論には至らなかった。

やはり、身分も考えず伯爵家でのうのうと過ごしていた自分を鬱陶しいと思っていたんだらうか。

小さい頃は、屋敷に住み込んでいた。

いつも一緒にいたと思う。

あの頃は、本当に子供だった。

彼の気持ちの変化も、世間の目も何にも知らなかった。

表情が出ない、分かりにくい人だけに影で人を馬鹿にしていたとは、本当に失望したとエヴァは考えていた。

エヴァをゴミのように捨てた人間。

父母は恩のある伯爵家の後継者に対してはつきりと言いつつ切った。

夫人とは連絡をとるが、息子のことは一切話題に出させなかった。

子供のことも言わなかった。

双子は彼等にとって大切な孫なのだ。

たとえ、財力に優れている伯爵家を相手にしても、最初にいらないと拒否をして小切手を渡してきたのはアイザック家だ。

ロンドンに住むことで子供のことを知ったとしても絶対に渡さない面会もさせない。

エヴァも彼女の父母もそう誓っていた。

生きていく世界が違うから彼は私達の子供のことは認めたくないはずだ。

けれど生まれた後、両親の説得で手紙を書いた。

電話じゃきつと未練がましいことを言ってしまうから。

アスランの連絡先は知らなかったけど、アイザック法律会社の住所は分かっていたから宛先はそこにした。

けれど、返事はなかった。

するべきことはした。

これで彼は子供たちに対する権利を失ったと言っていていいはずだ。再会したアスランに対してエヴァは強気だった。

「リサ」1

私が初めてアスラン・アイザックに会ったのは、高校生になった時だった。

イギリスの社交界において、アイザック伯爵ほど有名な貴族は居ない。

弁護士事務所を経営していることとか、その容姿端麗な所とかは有名だった。

私は子爵家の令嬢だ。

父親は不動産関係の仕事をしていて、顧問弁護士にアイザック法律事務所の弁護士を雇っている。

その関係もあって小さい頃から、彼等家族のことは実際に会ったこととはなくてもよく聞かされていた。兎に角優秀で容姿も端麗である。

しかし、噂など信じてなかったし、私はホーク家ではお姫様だった。自分が一番。だから、どんなに優秀な男でも私以上に素晴らしい人間はいないって母からは言われていた。“なんて可愛らしくて、頭の良い子なのかしら。” そういわれて育った。

お金に困った生活はしたことがなかったし、それなりに頭も良かった。

容姿だって、捨てたもんじゃない。(母のは、欲目にしたとしても) 中学の時から彼氏だっていたし、私が強請れば年上の彼氏なんかは何でも買ってくれた。

親の前では、深窓の姫君を演じていたから、私を敬い傳く者とのデートやセックスはストレス発散になったけど、年上の彼氏は、私が

まだ中学生だと知ると顔を引きつらせて去っていった。
楽しければいいじゃない、どうして年に拘るの？
綺麗だ、可愛いって言ってもてはやくしたくせに。
よく妊娠しなかったものだと今なら思う。

幼馴染のトーマスは、私を我侷なお嬢様というけれど、人の上に立つ人間なのだから仕方ないことなのに、生意気だと思う。

けど、彼ってば、きっと私のことが好きなのね、何だかんだ言っ
て世話を焼いてくれる。

つと言っても、元使用人の息子なんだから、言うことを聞くのは当
り前。

少々シャクなのは私よりも頭がいいことかしら。

早い内から弁護士になることを目標に上げていて、中学の頃から弁
が立ち、生意気にも私に意見してくるようになった。

「また、無駄使いしたんだって？それに男遊び。頭いいくせにサボ
つてると、高校になんか通えないぞ。」

私への小言がお父様を通じて成されていることだっ
て分かっていた。お父様は直接私に文句が言えないからトーマスに言わ
せている。

「お父様ね、お母様からまた一言言ってもらわなくっちゃ。」

まあ、お父様は、お母様の家の婿養子になったこともあって逆らえ
ないの。

お母様はよく言っている。

いくらお金に目が眩んだとは言え、お父様のような成金を婿に迎
えるんじゃないかって、お父様は気品つてものがないんだもの。

社交界に連れて行くのも億劫だっ
て仰ってたわ。

だから、私は私に相応しい人を探すの。

「親父さんはお前を愛しているから、苦言を呈してくれるんだ。」

「苦言？女系家族で立場がないから、自分で言えないのよ。それよ
り、トーマス。あんた、好きな子できたんですって？」

私の言葉に彼が怯む。

だいたい生意気なのよ。元使用人の息子の分際で私より幸せになるつもり？

「彼女に余計なことをするなよ。」

鼻で笑ってしまつたわ。

「余計なこと？私はただ、貴方を好きだつていう女の本心を暴いて
いるだけ。家を辞めて後始めた貴方のご両親が経営しているレスト
ランが軌道に乗ってるから、彼女達は貴方に近付いているの。それ
に、トーマスつてば、いつも首席でしょ？下心があるのよ。」

苦々しい顔をするトーマス。

「お前と一緒にするな。」

「私と彼女達が一緒？冗談じゃないわ。あの子達と私じゃ育ちも教
養も全て違うの。」

貴族制度の重要性がすっかり意味のない現代においても、女王陛下
がいるこの国で私達貴族は特別なのだ。

「同じ教育を受けられるだけでも神に感謝しなきゃならない人達で
しょ？私は何も望まなくても、手に入る地位にいるの。お父様の命
令だからつて、余計なことを言わないで頂戴。」

弁の立つトーマスも結局は自分の出生にコンプレックスを持つてる
から私に意見したくてたまらないのよ。

軽々しく私に声をかけることも本来なら許されない。

それを許しているのは、トーマスが悔しいことに容姿が整っている
からに過ぎない。

背が高く女にモテル男だから。

一緒に居たら、周りの女生徒達は羨ましがるんですもの。

高校に入ってそのトーマスが一緒にいる男に私は目を奪われた。

いい男つて言うのは私の側にいるべきだと思つてるから、彼を見逃
していたことに腹が立った。

「誰？あれ……。」

一緒に居た男の袖を掴み尋ねる。

この男も私にとっては只の飾りだ。

頭がよくて、綺麗な私をお姫様扱いしてくれる成金の息子。

「あー、アイザック伯爵家の長男だよ。あの見た目で、女にモテモテ。でも、硬派でさ、目に入れても痛くない幼馴染の彼女がいるって噂。」

彼女？

そんなの関係ないって思った。

だって、彼を見て思ったもの。

彼こそ私の運命の人だと。

つづく

「リサ」2

アスラン・アイザック。

銀の髪に青い目。

妖精の様に整った顔。

金髪碧眼の私にとってもお似合いだと思う。

しかも伯爵家の長男……。

トーマスと話が合うようだからきつと頭もいいのだろう。

私は一緒に居るトーマスに声をかけた。

「ハイ、トーマス。」

私が声をかけてあげたんだから、返事なさいよ。

「……リサ……。何だよ……。俺に声をかけて来るなんて。」

貴方にじゃないの。

「私の知らない人と話してるから、誰なのかなって、紹介してもらおうと思ったのよ。」

彼の視線に入る椅子に座る。

「こんにちは、私はリサ。リサ・ホークよ。」

彼はニコリともしないで差し出された手を握手してきた。

大きくて頼りがいのある手だと思った。

「……離してくれないか？本が読めない。」

「あら、ごめんなさい、貴方の方が離したくないんじゃないかと思つたの。」

いつもの笑顔が彼には通じなかった。

彼は少し首をかしげる。

「君はトーマスの幼馴染？」

「そうよ、私も法律に興味があるの。将来は、貴方のところの事務所で働きたいわ。」

彼の目が大きく開く。

「へえ、おしゃれにしか興味がないのかと思つたよ。」

「あら、おしゃれするため勉強してお金を稼ぐのよ。」
彼は少し笑いながら視線を本に戻した。
これは、脈アリだわ。

彼女がいるって聞いたけど、それらしい女の影はないみたいだし。
トーマスがいきなり私の腕を取って席を立たせる。

「ちよつと、来い。」

アスランに挨拶をしてその場を離れる。

何なの？

「どういつつもりだ？」

「どうもこうもないわ、法律に興味があるの。」

「法律？嘔吐くな。アスランが狙いか？」

私はトーマスが掴んでいた腕を振り払った。

「何処が悪いの？彼こそ私に相応しいブランドだわ。」

「アスランは、ブランドじゃない。人間だ。」

「その陳腐な科白、片腹痛いわ。言っておくけど、邪魔しないで頂戴。邪魔したら、貴方の今の彼女にあることないこと言って別れさせよ。」

トーマスが、自分に合った身の丈の彼女を得たことは知っている。
とても大事にしているとのことだった。

トーマスは彼女のことを出されると強く言えなくなる。

あんな女の何処がいいのか。

どうせなら、貴族の称号を持った彼女にすれば将来有意義なのに。
その日から私はアスランに猛烈なアタックを開始した。

アスランの彼女だと噂されるエヴァンローズ・アドウッド。

学者の父親と母親はアスランの母の実家で家庭教師をしていた一家
の娘だと言っ。

貴族でもなんでもない女。

しかも、笑ってしまっくらいダサイ。

髪の毛はくすんだ金色。

その瞳も茶色。

顔にはそばかすがあるんじゃないかしら。

図書室の一角で本を読んでいた彼女に声をかけた。

「ハイ、」

顔を上げた彼女を見て確信した。

アスランは私を選ぶと。

「・・・なんでしょう。」

気付いたのね、私と貴方が違う人種の人間だって。

「貴方がエヴァンローズ・アドウツド？」

見たまんま、ガリ勉。

アスランより、トーマスより頭がいい才女らしい。

「そうですけど・・・。」

私はすつと手を差し出す。

「私はリサ・ホーク。貴方にお願いがあって。」

「・・・あ、あの？」

「貴方のこと、アスランが褒めていたから、とつても頭のいい幼馴染なんだって。」

彼女が少し動揺したことは見逃さない。

あれだけ素敵なアスランに恋をしない女なんて居ないと思うわ。

「図書室のことなら、司書に聞くより貴方の方が詳しいのでしょうか。だから、この本がどこら辺にあるのか知りたくて。」

一枚のメモ、それはアスランに教えてもらった本の名前。

もちろん、筆跡は彼のモノ。

ふふっ、気付いたのね。

「今、図書室のコンピュータは壊れてて・・・。」

「ええ、アスランに聞いたわ。で、貴方なら知ってるはずだって言うから。私、エヴァ、貴方とお友達になりたいの。」

彼女の汚い瞳が開かれる。

「えっ？」

知っているのよ。

貴方が伯爵家に居候していること。

そのことが原因で中学時代は友達が居なかつたこと。

私の側に貴方を置いて、違いというものを教えてあげる。

「私、見た目が派手でしょう？よく誤解されるの。だから、アスランがエヴァなら友達になつてくれるよつて教えてくれたから。駄目かしら？」

彼女の三つ編みが横に揺れる。

「わ、私でいいの？」

「エヴァだから、いいのよ。」

嬉しそうな笑顔を見せた彼女。

今は笑っていればいいわ。

アスランは私のものよ。

つづく

「リサ」3

アスランとそのお仲間が勉強会を開く情報を得た。私は、その会に参加して、分からないことがあるとエヴァの部屋に行った。

伯爵家の中で唯一質素な部屋。

あの部屋を見たときホツとしたものだった。

だって、あの夫人なら、息子の好きな女の子の部屋を可愛く、綺麗に装飾するはずだもの。

「エヴァ？」

「リサ・・・来てたの。」

この部屋に来るようになって、私は、アスランのことが好きであることを彼女に語った。

少なからず彼も私を思っていることも伝えた。

傷付いたような顔を見るのが愉快だった。

身の程を知る必要があるの。

「うん、ごめんなさい、今いい？」

「ええ、もちろん・・・どうしたの？」

「アスランがね・・・酷いこと言うの。」

「酷いこと？」

彼女が真剣な目になる。

「私が違う男の子と一緒に居るだけで浮気者だなんて言うのよ。彼とは何も無いの。ただ偶然歩いていただけなのに・・・。」

うんうんと聞いているエヴァ。

ほんと、馬鹿な女。

「やっぱり、派手だから誤解されるのかな・・・もっと地味な格好の方がいい？これだけ一緒に居るのにまだ告白もされないの。どうしたらいい？」

エヴァはまた傷付いたような顔を見せた。

「リ、リサは、そういう華やかな方が似合つと思つ。それに、それ
つてアスランの嫉妬だと思う。リサに近づく男は皆許せないんだよ。」
「
苦しそうに言う彼女に満面の笑顔を見せて抱きつく。

「エヴァ、大好き！貴方だけよ、そう言ってくれるの。」
「・・・私も、リサが好き。」

ありがとう、つてそつと囁くと嬉しそうな顔をするエヴァ。
ホント馬鹿な女。

それから数日後、エヴァが言った。

「アスランを怒っておいたよ。リサを浮気者つて言ったでしょつて、
聞いたら“言つた”つて言うから。リサは、一途な子なんだつて。」
「
あら、確かめたの。」

そんな勇気ないと思つてたけど。

「ありがとう、エヴァ。これでアスランも告白してくれるかしら。」
「
う、うん、そう思うよ。」

その日の帰り、アスランに呼び止められた。

「エヴァに何か言つたのか？」

「え？何も言つてないわよ。ただ、私は男友達が多くて顔が広いだ
けなのに、アスランに浮気者つて言われたことを言つただけ。」
「
嘘の中に本当を混ぜる。」

「嘘じゃないだろ、リサはもっと自分を大切にすべきだ。」

「じゃあ、私を大切にしてくれよ。仲間としてでいいから。貴方の輝か
しい将来の手助けがしたいの。トーマスやニコラス、ジョンのよう
に。」

「そういうことなら、・・・喜んで。」
「
そう言つたアスランに抱きつく。」

高校も最後に近付いた今、彼には、私のプラムパートナーになつて
もらつ。

「だ、抱き合ってたね。」

いつもの勉強会、エヴァが言った。

「やだ、見てたの？ 恥ずかしいわ。」

やっとアスランに告白されたんだとエヴァは思っているようだった。

「で。エヴァはプロムどうするの？ 誰と出るの？」

ハツと顔を上げるエヴァ。

彼女みたいな子を誘ういるわけないと分かかって尋ねる。

もちろん、エヴァはアスランの相手は私だと思っているだろう。

「卒業式が終わったら一旦、田舎に帰って父さん達に報告しなきゃ

って思ってるの。」

「出席しないの？」

そりゃそうか、私とアスランが注目されるパーティーに出たいなんて

さすがに思わないわよね。

「たぶん、」

私は彼女の部屋を出た。

廊下で伯爵夫人と使用人達が話をしている声が聞こえた。

僅かに隙間が開いているドアから覗き込むと、夫人の前にアイボリ

ーのドレスが飾ってあった。

「どう？ エヴァに似合うと思ってデザインしたのよ。コレを来たエ

ヴァをアスランが誘わなかったら、本当馬鹿よね。」

アスランが私じゃなくて、あの子を誘う？

「お互いに何を遠慮してるのか知らないけど、息子の恋愛にはでき

るだけ口を出さないって、主人に誓ってしまったから、もうヤキモ

キするわ！」

それに、夫人は、エヴァを気に入ってるって言うの？

あんな冴えない子を？ 貴族でもないのに？

そんな馬鹿な。

アイザック家の夫人といえは生粋のイギリス貴族でしょ？ どうして

エヴァをいいだなんて思えるの？

私はフラフラしながら、アスラン達の待つ部屋へ戻った。

「どうした？顔色が悪いよ？」

ニコラスの言葉。

「そう？」

アスランが立ち上がる。

「リサ、今日は帰れ。できるなら、もう来ないでくれ。君はこの勉強会に居てもエヴァのところにはかり行って、何もしてないんだから。」

「ひ、酷いわ、た、確かに勉強はしてないけど、エヴァと私は仲が いいのよ？引き裂く気？」

涙なんて幾らでも流せた。

プロムの日は、本当に忌々しかった。

注目を浴びるエヴァが。

彼の隣に居たのは私のはずだったのに。

やけくそで誘ってきたトビーと会場で会う。

不機嫌にならないはずはなかった。

エヴァに隠していた毒が少し漏れてしまった。

あのアスランの目。

大切な宝物を見るかのような目。

許せない。

今夜、彼はエヴァを抱くのかしら……。

許さない。

女の顔になったエヴァが憎くてたまらなかった。

アスランは相変わらずのポーカーフェイスだけど、大学に入るなり留学の計画を仲間達と立てているようでエヴァとはすれ違いの生活らしい。

訪ねたエヴァの部屋で彼女は私を見て動揺していた。

そりゃそうよね、友達の男を寝取った形になったんですもの。

彼女の戸惑い、贖罪が手に取るように分かった。

だから、言っちゃったの。

「私、アスランを許そうと思って。プロムのことよ。アスラン怒ってたから。私が彼を無視してトビーを誘ったから。次の日、彼つたら謝りに家まで来てくれたの。愛してるのは私だけだって言ってくれたわ。ごめんね、エヴァ・・・バージン捧げた相手が彼で。でも分かるでしょ？貴方と彼じゃつりあわないって。貴方は田舎で子供相手に教鞭とつてる方がお似合いよ？」

私の嫌味を怒りと受けとつたらしいエヴァは泣きながら謝ってくれた。

「アスランには、出来る限り近寄らない。ごめん、ごめん・・・リサ。」

「友達だと思っていたのよ、エヴァ・・・貴方もアスランのことが好きだったのね。」

彼女の顔がハツとなる。

「違うっ、違うわっ！私は、アスランなんか好きじゃないっ！ごめんなさい。」

抱きついてくるエヴァの頭を撫でる。

「いいの・・・でも、二度とこんなことしないで。したら、絶対よリサ。私から親友を奪わないで。」

コクコクと頷く彼女。

心の中で笑いが止まらなかった。

大学で、アスランとエヴァは面白いくらいにすれ違っていた。

間に私が入ったこともあるから、わざと会わせなかったというのもあるけど。

エヴァは私とアスランが婚約してると思いこんでるし、アスランは、どうなのか、エヴァに声をかけるタイミングを失っているようだったわ。

伯爵夫人には相変わらず呼び出されているみたいだけど、何回かに

一回は私のショッピングの荷物持ちを優先させてくれた。
もう一つ、決定打があれば、完全に別れることになると思うんだけ
ど。

大した顔も、体も家柄もないくせに高望みをするエヴァ。

『Cry For The Moon』

その意味を分からせてやる。

つづく

「リサ」4

どうやったら、アスランとエヴァをもつと引き離すことが出来る？
グレックという男にエヴァの誘惑を頼んだ。

アイツは、私に夢中だから言いなりだ。

できるだけ親しそうにエヴァに優しく声をかけてその気にさせるように指示したけど余り上手くいってない。

どうしてエヴァをそんなに憎んでしまうのか。

それがハッキリしたのは、エヴァの部屋を訪ねた時の事だった。

「誰からの手紙なの？」

部屋に入った時に伏せられた手紙。

エヴァは少し照れた顔をした。

「りよ、両親からのなの。田舎の研究所で働く父さんと地元で教師をしてる母さんから……。いつも心配かけてるから……。」

両親の中がよいことをひけらかすエヴァ。

彼女の母が作ったニット類や、田舎の写真が多く入っていた。

「仲がいいのね。」

「うん、私が唯一自慢できるものかな、リサもいつか来て？自然が一杯あっていいところだよ。」

彼女の笑顔に笑顔で返事したけど、行く気なんかなかった。

うちは、夫婦仲が悪い。

先日、お父様の浮気が分かった。

お父様は、何もかも捨てて、浮気相手と再婚したいと言ってきた。

もちろん、そんなことホーク家の名を汚す行為だから、お母様が許すはずもなく、今、家はギスギスしている。

それなのに、エヴァは……。両親に愛されて、伯爵夫人にも気に入られて……。アスランにも。

この子と私なら、私の方が綺麗で優秀なのに……。

自分だけが幸せで誰からも好かれてると思っっているエヴァが憎かつ

た。
だったら、貴方が一番好きなアスランを私が奪ってあげる。
アスランの心を手に入れなくても貴方を傷つけて、宥めて裏切っ
てあげる。
いつしかそんな思いに取り付かれていた。

ちょっとした予感があった。

いよいよ彼の留学まで後少しという時、その予感の原因を探ろうと
アスラン達のマンションを訪ねた。

そのマンションから出てきたのはエヴァ。

すれ違い様に感じた違和感。

逃げるように去っていかうとする彼女を捕まえて顔を覗き込んだ。

血の気が引いた。

アスランは、またエヴァを抱いてしまった。

きつと通じないと思ったけど、ありつたけの罵詈雑言を彼女に浴び
せた。

エヴァは目を真っ赤にして泣きながら謝ってきた。

何？アスランは貴方に愛を囁かなかったの？

心の中で高笑いをする自分の声を聴いた。

懸命に謝ってくるエヴァ。

そう、そうよね、貴方は私のことを初めて出来た親友だと思ってる
ものね。

その日以降、エヴァはアスランを徹底的に避けていた。

留学を控えたアスランは忙しくて、でもエヴァに連絡が取れないこ
とに焦っていた。

「アスラン、エヴァには私が伝えるわ。だって、もう日がないもの。
もし会いたくないって言われても、私が貴方の気持ちをちゃんと伝
えるわ。」

トーマスがどういってもりだと言ってきたけど、言葉の通りだと告

げた。

「2人が誤解しあっているのは本当ね。でも、そこまで世話を焼くつもりはないわ。どんなに忙しくても会おうと思えば会えるのに、それをしないアスランに問題があるのよ。私のせいじゃないわ。」
トーマスは何も言えなくなっただけだ。

「だって、そうでしょ？」

「お互いを信じない2人が悪いの。」

「こうなったら、何が何でもアスランは私がいたたくわ。」

エヴァには、家族がいる。

「だったら、アスランの1人くらい貰ってもいいわよね、彼ほど私に相応しい人はいないんだから。」

「旅立ちの日、アスランは夫人の力も借りてエヴァを探したみたいだけど、結局彼女は見つからなかった。」

「ごめんなさい、エヴァだったらどうしたのかしら。」

「随分探して、説得したとアピールする。」

「いや、いいんだ。」

アスランは旅立っていった。

「アメリカから何回も寮のエヴァ宛に手紙があつたみたいだけど、すべてもみ消した。」

「寮母は金さえ払えば、どんな生徒の個人情報だって売ってくれる女だった知っていたから。」

「エヴァの代わりに、一度だけさよならの手紙をアスランに書いた。いい気味。」

「エヴァが飛び級して大学を卒業し、教員免許を得たことを知った。」

「帰るの？」

「ええ、リサにはお世話になったわ。ありがとう。」

「いいのよ、私達は友達でしょ？」

「ハグして別れた。」

「この服は焼いて捨ててしまおう。」

私の人生からエヴァンローズ・アグリッドは消えたんだ。

つづく

現在「2」

エヴァの心の中はもう直ぐ沸点に達しようとする湯のようだった。

これ以上、彼と話をしていたら、リサとの結婚生活はどうだの、子供はいるのか色々と探りを入れてしまいそうだった。

「君の子供はとても優秀だそうだな……。」「
全てが癪に障る言い方だと感じていた。

「私の子供ですから、」

それはエヴァが胸を張って言えることだった。

「では、授業の準備がありますから、失礼します。」

「エヴァ！」

彼が呼ぶ声に思わず立ち止まった。

「……。何でしょう。」

「いや、いいんだ。」

エヴァは部屋を出て後手に扉を閉めた。

途端に力が抜けそうになる。

「「母さん？」」

気が付くと双子が目の前に立っていた。

エヴァはハッとして双子を両腕に匿うと理事室を離れた。

「どうして、ここにいるの？こっちは貴方達の校舎と違うでしょ？」

双子達は迷子になっただけだと言ったが、実際は、父親が学園に来ていると知って顔だけでも見てやろうと思ったのだ。

まさか、母親がその部屋から出てくるとは思ってたが。

双子は密かに理事であるアスラン・アイザックのことを探っていた。

「ちょっとお聞きしていいですか？」

小さくて愛らしい天使のような双子に誰もが気持ちよく答えてくれた。

「まあ、何て可愛らしい双子ちゃんかしら、」

「噂には聞いていたけど、エヴァンローズ先生のお子さんでしょう？」

2人は文字通り天使の笑顔で挨拶をする。

ここは、職員室。

母親の姿がないことを幸いに話を聞きだす。

「で、何を聞きたいのかしら？」

「この学園の理事さんって、どんな方なんですか？」

先生方はこの学園の理事をしている方々のことを語っていく。

「若い人もいるんですか？」

「そうね、若いといえば、アイザック卿は大した人だと思うわ。」

アイザック。

やっと出てきた名前に双子は息を飲む。

“卿”ということは、貴族か。

双子は互いに視線を合わせ、次々に話を聞きだす。

アスランが若い年の割りに立派に仕事をこなしていること。

弁護士としても成功し、父親の後を立派に継いでいること。

社交界の憧れの人であるが、誰一人として彼の心を射止めていない

こと。

リサという彼の秘書が彼に近付こうとする女を排除していることな

どいつしか双子のことなど忘れて話し込んでいた。

「ルークどう思う？」

「話を聞いた限りじゃ人徳者って感じだね。」

「女のことになるとだらしのないのかな？」

「んー何にしろ、母さんとボク達の敵だね。」

「敵だね。」

幼い子供の言葉とは思えない会話である。

ふと職員室を出る時に聞こえた言葉。

「そういえば、今日はアイザック卿が来てるのよね。」

2人は急いで理事室に向かった。

経った7歳であるが、2人は校内の地図を頭に入れていたため、簡

単にたどり着くことが出来た。

こっそり、顔を見るだけと思っていたら、エヴァが出てきたのだ。

双子を見つけるなり逃げるように理事室を後にするエヴァに双子達の心が痛んだ。

「誰に会ってたの？」

知っていて尋ねてみた。

「理事さんよ。今日は貴方達はもう終わりでしょ？図書室で待ってなさい。一緒に帰りましょう。」

2人を両サイドに連れて歩くエヴァ。

かすかな震え。

それを子供達は感じ取っていた。

祖父母も優しく、厳しく育ててくれたがやはり母の愛情が双子にとつては一番嬉しいものだった。

（父さんなんて、呼んでやるもんか！）

双子の誓いはアスランには手厳しいものだった。

つづく

現在「3」

双子はその性格の全てを隠してニコニコ、従順に教師達に従っていた。

「来る日も来る日もテスト、テスト、テスト。」

「イヤになっちゃうなあ・・・。」

こんな愚痴を漏らすのは母の前だけだ。

「クラスの皆とも遊びたいのに、先生が許してくれないんだ。僕たちにはするべきことがあるって。」

エヴァは2人の言うことを鵜呑みにするわけではないが、彼等の学習スケジュールには少々行き過ぎたものを感じていたため休み明けには、詰め込みすぎの教育に対してどういふことを聞く予定だった。

「イヤなら、イヤって言えばいいのよ、母さんは貴方達に無理をして欲しくないの、自分達がまだ小学一年生だってこと、忘れてない？」

優しい母。

双子は自分たちを気遣う彼女を誰よりも愛していた。

大人達のいいなりにならなければ母が困るのではないかとかも考えていたようだった。

「「うん、母さんありがとう。」」

母に抱きしめられるのが好きだった。

母にお礼を言うと、エヴァは必ず、

「こちらこそ、生まれてきてくれてありがとう。」
と言って抱きしめてくれる。

母に愛されていることが双子は自慢だった。

「ね、母さん。買い物行くって言ってたでしょ？」
思い出したようにルークが言う。

「ええ、ロンドンは久しぶりだし、貴方達に何か服でも買えればって思ってるの。」

母の楽しそうな笑顔を見てしていると嬉しいものだった。

「僕は、スウドクの本が欲しいな。」

アーサーがポツリと言った。

彼は現在数独に夢中である。

夢中と言ってもその趣味は長い。

彼等が5歳の時にエヴァが嵌ったものだったが、頭のいい双子は母のしているものなら何でもしたが、広げている本にかじりついた。どちらかと言えば文系のルークは、数日で興味を他のものに移したが、アーサーはその頃から数独が大好きになってしまったのだ。

「また？アーサーは数独ばかりだ。僕はクロスワードの方が好きだな。」

ルークは言葉遊び的なクロスワードに嵌っている。

「ふふつ、取り合えず、本屋さんには行きましようね。」

「「はい」」

身支度をするために母が席を立つ。

「あ、そうそう、ハロツズの前でお友達と待ち合わせなの。」

双子が母を見た。

「友達？」

「ええ、こっちに居る時に何かと親切にしてくれた・・・母さんにとっては、親友ね。彼女には酷いことをしてしまったけど、私を許してくれたの。」

母親が人に酷いことをしてしまったと言うのを聞いて双子は興味をひかれた。

「どんなことをしてしまったの？」

「友達って誰？」

双子が珍しく母親のスカートを引っ張りながら聞いてきた。

「酷いことは・・・もう少し貴方達が大人になったら話してあげるわ。友達の名前はリサよ、リサ・ホーク・・・いえ、リサ・アイ

ザックかしら。」

ふと見せる顔に悲しさが混じっていることに双子は気付いた。そして、顔を見合わせる。

母の語る酷いこと。

その内容の真意は分からないが、その中に自分たちのことが含まれていることは何となく分かる双子達であった。

「リサ……。」

「そう、昔から美人で一目を惹いてたわ。社交的で母さんとは正反對。でも、私の悩みとか相談とかに真摯に耳を傾けてくれたの。」
自分達が調べ聞いた父の話の中に出てきたリサという女には、あまり良い印象を受けなかった。

母ではなく、リサを選んだ父。

双子はニツコリと母に微笑んだ。

「楽しみだな。」

「母さんの親友に会えるなんて。」

その微笑の意味するところをエヴァは一瞬考えた。

「なあに？その微笑み。悪戯する時に出る感じに似てるけど？」

双子の企みに気付くものは少ない。

特に会話や表情で読み取るのは母であるエヴァだけだ。

「初対面のリサに悪戯しちゃだめよ？」

「「しないよ。酷いなあ、母さんったら。」」

口をついて出た言葉が揃っていることにも目を細めるエヴァ。

（何を企んでるのやら。目を光らせとかなきゃ。）

一方双子達は……。

（母さんには、いつも見破られるな。）

（ちょっと、リサって女に聞きたかっただけなのに。）

母の動向に気を付けながらリサという女を見定めようと考えている双子であった。

UNU

現在「4」

ロンドンの街は思っていた以上にでかくて古くかった。

これが父さんの住んでいる街か。

午前中は2階建ての赤いバスに乗って、観光を楽しんだ。

母さんは、話しかければ答えてくれるけど、言葉は少ない。

父さんのことを思っていると考えると悔しくなった。

俺達がいるのにと、わざとふざけて母さんの注目をこっちに向けさせたりした。

観光を一通り終わるとハロツズっていう老舗デパートへと向かった。銀髪の双子が珍しいのか街行く人が俺達を見ていた。

自分たちで言うのもなんだけど、俺達は目立つ。

大きくなったら将来が楽しみだと祖父ちゃんや祖母ちゃんは言うってたけど、母さんは少し複雑そうな顔をしていた。

祖母ちゃんに尋ねたら、俺達は、父親に似ているらしい。

だったら、こんな顔いらなかったのに。

大好きな母さんを悲しませる父さんに似た顔なんていらぬのにつて幼心にも思った。

だから、今よりもっと幼い頃は、母さんに何度も2人で「ボク達のこと好き？」って確認をしたと思う。

「ねえ、母さん、母さんの友達ってどんな人？」

「どうして、友達になつたの？」

ランチは家族で取ろうと入った店で母さんに聞いてみた。

「リサは・・・私が1人でいた時に声をかけてきてくれたの。母さんは、貴方達みたいに、頭が良くて、勉強が出来たから、とあるお屋敷に居候になって都会の学校に通うことになっていただけ、そのお屋敷は皆の憧れの家で・・・小さい頃は、何も気にせずにいられたんだけど、大きくなってくるとイヤでも周囲と私が違うんだなって思えたの。沢山、苛められたわ。その屋敷に住んでいる子は

庇ってくれたけど、・・・その子は、よく女の子にモテたから、庇われるほど辛い目にあつたわ。だから、できるだけ1人でいよう、関係ないフリをしておこうって。」

あの写真で見た可愛い母さんが苛められてたなんて・・・。

俺達は言葉を無くした。

「そんな中、唯一声をかけてきてくれた女の子だったの。リサは。」

お金持ちで貴族の令嬢で。

華やかで目立つ存在だった彼女が気さくに自分に声をかけてきてくれたことに戸惑った。

「きつと、居候先の男の子目当てだと思ってたんだけど、屋敷に来る度に、私の部屋に遊びに来てくれて、学校以外でお友達と勉強するのって初めてで、嬉しかったなあ。苛めもリサと友達になってから少なくなつて、ますます勉強に身が入るようになったのよ。教師になれたのも彼女のお蔭なの。」

自分達の推測から言うと、リサという女は母親が考えているよりもっと強かな思考を持っているはずなだけだな。

信じきってる母さんが、傷付くことだけは避けなきゃ。

アーサーと目を合わせてため息を吐く。

「どうしたの？母さんが苛められっ子だって聞いて、イヤになつた？」

どうして、そんなこと考えるのさ。

「僕達は母さんが大好きだよ。」

これから会うことになるリサという女の化けの皮を母さんに知られずにどう剥がせる？

ロンドンの喧騒の中、俺とアーサーは頭を抱えたくなくなった。

約束の場所に女は10分ほど遅れてきた。

「ごめんなさいっ、エヴァ。」

抱擁を交わす2人をじっと見ていた。

（ ）（こいつがリサか。なるほど・・・。）（ ）

男好きそんな容姿の派手なオバサンだとルークと共通認識を得た。俺だったら、母さんみたいなタイプを選ぶけど、父さんは違ったんだな。

ため息を吐いていたら、女がこっちを見た。

「この子達が、貴方のお腹にいたのね？」

感動の対面って顔をしているけど、驚きは隠せてないみたいだ。

俺とルークは、父さんに似ているから。

香水臭い体で抱き付かれそうになって、思わず2人で避けた。

「母さん、この人臭い。」

はつきり言ってる。

「えっ？」

香水どれだけ降ってたんだ。

「あ、あら、お子様にはキツかったかしら。」

女の目はちっとも笑っていない。

金髪碧眼。

なるほどね、モンローみたいな黒子まで男好きしそうだ。

「ごめんね、リサ。」

「いいのよ、で、ハロツズで何を買うの？」

「えーと、この子達のフォーマルでも見ようかと思って。」

女は俺を無視して母さんに話しかけている。

「フォーマル？このお子様達、何処に行くの？」

俺とルークはとある研究所の学会に招待されている。

伝統ある研究所らしくて、子供の知能指数と現状についての研究論文が数台出されるみたいで、俺達はモルモットだから、そこに母さんと一緒に出席するんだ。

「学会！へえ〜。じゃあ、エヴァもドレスが必要なんじゃない？」

「私は、いいの。スーツで行くわ。裾の長いドレスって嫌いだから、

リサって女は鼻で笑った。

「そうね、貴方ならコケてしまいそうだもの。」

なんだ、その嫌味。

心配なんかしてねーだろ。

それから、俺とルークはリサって女の言葉にイライラしながら、疲れたフリをした。

カフェのソファで母さんに凭れて眠る俺達は2人の会話を聞いていた。

「アスランに会ったんですって？」

母さんの体に緊張が走る。

「え・・・ええ。学園の理事をしてたみたいね、知らなかったわ。」

「彼に言ったの？子供のこと。」

母さんが俺の頭を撫でている。

「子供がいることは知っているけど、自分の子供だとは露ほども思っていないみたい。」

「そう・・・できるなら、この子達には一生アスランに会ってもらいたくないわ。」

リサの言葉に母さんの緊張が伝わってきた。

「世間体を考えても、アスランは今ロンドン1の弁護士なの。子供をおろすためにお金を積んだってことがバレたら、信用に関するわ。」

「分かってる・・・アスランと貴方の生活を壊すつもりはないの。」

ただ、本当にロンドンに来ることになるとは思ってたから・・・。

薄目を開けると涙を浮かべたりサって女が母さんの腕を取っていた。

「お願いよ、アスランに会わないで。留学から帰って貴方がいなくなったと知った時、彼は本当に安堵してたの。私がいる手前、大声では言えなかったんでしょうけど。子供のことも正直に話して責任を取る必要はあるって説得したんだけど、子供よりも弁護士事務所での仕事が忙しくて、私に一任したわ。まさか、おろすためのお金だとは思わなかったけど・・・。」

母さんまで手を取っている。

「分かってる。私はあの人にとって、いらぬ存在。この子達を傷

付けさせないためにも、あわせたりしない。3年の研究期間が終了したら、私はまた田舎にもどろうと思うの。だから、その間だけ……。

「ああ、エヴァ。やっぱり貴方は親友だわ。これが、アスランの事務所の電話番号で、これが携帯よ。この電話には出ないでね。」

渡された紙。薄目を開けるとルークも起きていて、その番号を何とか覗き込んでいる。

そして頷いた。

よし。

母さんに会うなというなら、俺達が会って、父さんの気持ちを確認させてやる。

で、リサの言う通りなら、絶対に許さない。

俺とルークは心に誓った。

つづく

現在「5」

「母さん、次の日曜日、ジャクソンの家に行つていい？」
双子に尋ねられた平日の夜。

双子はそろいのパジャマを着て寝る用意は整っていた。

「ジャクソン？ええ、いいわよ。」

彼等が新しい学校に通うようになって出来た初めての友達である。クリクリの目と利発そうな顔付きの彼は双子同様知能指数が高かったことから、スカウトされた。

母1人子1人の過程で育つたジャクソンの母とは、直ぐに友達になつた。

公私混同はしない主義だが、彼の母親もまた教師をしており共通の話題が合ったのだ。

「ジェニファーに迷惑かけちゃだめよ？」

「分かつてるよ、じゃあおやすみなさい。」

ジャクソンの父親と母親は死別であり、双子とは少々環境が違うが、それでも3人は仲が良かった。そして、普段なら余り喋らないプライベートのことも彼になら話した。

「ひでえ、親父だな、制裁。制裁加えようぜ！」

すっかりやる気のジャクソン。

リサとの対面を終えた次の日に双子はジャクソンにその旨を伝えた。

「親父の会社には一切連絡するな、親父から連絡があつても取り合ふなつて、その女用意周到だな。信じきつてるお袋さんもお袋さんだけ。」

双子達も、エヴァがリサを前端的に信頼していることには少々呆れを感じていた。

「俺達は、ジャクソンがいてくれてよかつたよ。」

ルークの言葉にとうの本人は顔を真っ赤にして照れていた。

神童だ、何だと持ち上げられて、同じ年頃の友達は、こつちに来て

から出来なかった。

田舎で暮っていた時の方が多くの友達に囲まれた楽しかった双子は、風邪で長らく休んでいたジャクソンが気軽に声をかけて来た時は怪訝な顔を見せたが、彼が頭がいくせに裏表がなく気持ちのいい子供だったため、直ぐに仲良くなったのだ。

天才と言われる子供たちが集められた教室内でもジャクソンは臆することなく双子を皆に溶け込ませてくれた。

「ガキの頃はいいかもしれないけどさ、やっぱり同じ年頃の同性の友達ってのがいないのは、しんどいよ。しかもお袋さんは、苛められてたんだろ？リサってのがどんな悪女でも天使に見えたんじゃないの？」

リサと会った日に彼等が寝ていると思っていた大人達の会話は全て聞いていた。

「で、親父さんの弁護士のお社って何処にあるのか分かったのか？」ルークがニツコリと笑った。

「覚えたよ。数字を覚えるのはアーサーの方が得意だけど、電話番号くらいなら全然余裕！」

電話番号から3人はアスランの会社を突き止めた。

「次の日曜日に正確な位置を掴むために行ってみようかと思う。で、平日の親父がいる時に殴りこもうかと。」

アーサーの計画に3人は額を付き合わせて頷いた。

そして、日曜日、調べた住所をタクシーの乗り継ぎで訪れた3人。

「ここか、でかいな。」

ビルの案内にしっかりと書かれたアイザック法律事務所の名前。

日曜日のビルはガランとしていたが、一階にある画廊に訪れる者もいて3人は難なく侵入できた。

「10階。」

エレベーターに乗って上がっていく。

止まったエレベーターの扉が開き、ちよこんと顔を出して周囲を見

る。

「あつちだ。」

少し右に行くくと法律事務所の名前が書かれた入り口があった。受付嬢は居らず、鍵もかかっているらしい。

「ここだな。」

3人は集まって決行日を何時にするか決めかねていた。そんな中声がかかり、3人は飛び上がるほど驚いた。

「何をしている、」

振り向くと大柄な男がいた。

着崩したスーツに無精ひげを生やした男は、ニコラスと名乗った。

「お、俺はジャクソン、こっちは親友のアーサーとルーク。休日のビルつてのを調べてるんだ。」

誰かに会って問いただされた時の言葉も考えていた。

「ほう……、そりゃ関心……って、お前ら、どっかで見たよ
うな……?」

ニコラスがニヤリと笑った。

身構える3人の子供。

「ま、入れよ。」

鍵を開けて扉を押して子供たちを誘導する。

子供達は息を飲む。

躊躇する子供達にニコラスは言った。

「不法侵入で親呼ぶぞ?」

その一言で子供達は中へと入って行った。

つづく

現在「6」

綺麗に整頓されたオフィスだと子供達は思った。

休みの日だから静かだが、普段は自分の仕事に誇りを持って働く大人達が忙しくこの廊下を歩いているのだろうと子供達はキョロキョロした。

「おじさんは、休みの日に何してたの？」

「つこりとルークが笑うとニコラスはハツとした。

その笑顔を自分はやはり知っていると思ったからだ。

「明後日の法廷で使う資料の整頓？本当は、家でのんびりしたかったんだがな、同僚が風邪で寝込んだから、ピンチヒッターって訳だ。」

ニコラスの部屋も整頓はされていたが、数多くの資料が積まれていた。

「これ、パソコンに入れるの？」

「分析するの？」

「アナログな資料だから、こっちに入れるんだよね。」

子供達の興味は主旨から外れているようだったが、ニコラスの警戒を解くには丁度良かった。

「弁護士さんって、何人いるの？」

「この会社って、大きい方？」

「おじさんは、何が専門なの？」

「裁判に負けたことはあるの？」

「勝率は？」

矢継ぎ早な質問にニコラスは苦笑しながら、自分の子供もそうだと頬を緩ませた。

「お前等、親友に似てるだけあって、追及が凄いな。」

ジャクソンは双子がニコラスの相手をしている間に色々と物色していた。

「ねえ、おじさん。」

彼の声で振り返ったニコラスはギョツとした。

「これ、なあに？」

彼が持っているものは、レースのハンカチーフ。とても男仕様とは考えられないものだ。

「ちよつと古い感じだよね。」

双子もジャクソンの側に行き、ソレを見つめた。

ハンカチは、綺麗にアイロン付けされて、大切そうにビニールに入っていた。

「あゝワイフのだ。」

につこりと笑うニコラスにジャクソンはニヤツと笑った。

振り向くと双子もニヤツとその愛らしい顔に似合わず、腹黒いものに見えた。

「えゝ？奥さんって、キャサリンさんじゃないの？」

アーサーが写真立てを持って、その写真に書かれた“キャサリン”の相性“キャシー”の文字を指差して言う。

ニコラスはギクツとした。

「もしかして、初恋の人だったりする？」

ニコラスは引きつった笑顔を見せる。

「何のことかな？坊や達。」

「ふゝん、じゃあ、奥さんに聞いてみようか、ジャクソン。」

ジャクソンが左手に持っているものにニコラスはギョツとする。

それは、自分の携帯電話だった。

「この、ガキ共！！」

怒りだそうとするニコラスにルークが静かに言った。

「本当は、誰にも見つからず去るつもりだったんだ。けど、おじさんに見つかったから・・・強力してもらいたくて。」

「ボク達、変に頭が回るから、許してよ、おじさん。奥さんには黙っておくからさ。」

ニコラスが呆然とその言葉を聞いていた。

「・・・お前達、何の目的で、ここにきたんだ？」

アーサーはニコラスの家族写真を元の位置に戻して、違う写真を手に取った。

「この人のこと、聞かせて。」

指差したのは、彼にとつての古くからの親友。

出会った時から彼のことを思い出していた。

幼い頃の写真も見たことがあったじゃないかと自分の額を押さえる。目を瞑りもう一度親友の顔を浮かべ、いつも彼が見つけていた1人の娘のことも思い出した。

ハツとなり顔を挙げ、写真に写る親友と双子達を見比べた。

高校からずっと一緒だった、同じ職場で働いてもいる、銀の髪に青い目。

「お前等・・・。」

その見つめる瞳の輝きに言葉を無くすニコラスだった。

つづく

現在「7」

3人は並んでニコラスの前に立った。

「ボクの名前は、アーサー、こっちは、双子のルーク。そして、友達のジャクソン。」

見上げる6つの目。

青い瞳はニコラスに何かを懇願するような目で、琥珀色の瞳の少年は双子を擁護するかのようにキツとニコラスを見ていた。

「ボク達の苗字は、アグリット。」

その名前にニコラスは息を飲む。

「母さんは、エヴァンローズ・アグリット。」

ニコラスは後に凭れた。

大学時代の彼女の姿が思い出された。

儚いような笑顔を見せるアスランの愛しの君だ。

「母さんを裏切って、捨てた男のことを教えてよ。おじさん。」

双子の察するにアーサーから齎された言葉にニコラスはギョツとした。

「えっ？」

「エヴァ小母さんは、とてもいい人だ。その人を苦しめた男にアーサーやルークは復讐したいって言うてる。ボクだって、その男を許せないんだ。おじさん、アスラン・アイザックって奴のこと、全部教えてよ。」

小学生低学年と思われる彼等の言葉とは思えない。

ニコラスは言葉を失った。

「おじさんが初恋を未だに大事にしてて、奥さんに内緒にしていることは分かってるよ。」

ぐさりと刺さる棘。

「こんな風に脅したりはしたくないんだけど、あの男は弁護士だし。」

「大人の協力者が必要だったんだ。」

ニコラスは大きく息を吸うと、

「お前さん達は、アスランとエヴァちゃんの子供なのか？」

頷く子供達。

ニコラスは大きくため息を吐く。

「エヴァちゃんは、田舎に帰って結婚して・・・で、お前さん達が産まれたんじゃないのか？・・・って、ここまでアスランに似ていて他の男なんて思えないか。」

ぶつぶつと自分を納得させることを言っている彼の袖をひっぱる。

「あのさ、ボク達は、あの男に母さんに対する謝罪と、慰謝料、で養育費を支払ってもらいたいんだ。」

「アイツにリサって、イヤな感じの奥さんがいるのは知っているけどさ、そこら辺しっかり貰っておこうと思ったださ。」

ニコラスの呟きが止まる。

「ちょ、ちよつと待て。誰が奥さんだった？」

3人の子供達は顔を見合す。

そして、ニコラスを見上げた。

「リサって女。アイツが母さんより、ボク達より選んだ女でしょ？」

「くっさい女。化粧も濃くて、いちいち母さんに嫌味言っの。」

口々に出るリサの悪口にニコラスは噴出す。

ニコラスは、アスランが何も言わないなら何も言わずを貫いてきたが、彼が誰を愛しているのは知っていたし、リサが何やら裏でコソコソしているなと思ったが、エヴァの子供達がこれほどまでにアスランを悪だとしている現実にはどんな手を使ったのか興味を覚えた。幼馴染であるトーマスは早くからリサを見限っていたから彼女の行動は知らないだろう。

ジヨンはあからさまにリサとは関ろうとしてなかったし、アスランは女心に恐ろしいほど鈍感だったと思う。

そんな中で自分はエヴァとアスランが上手く行くといいなと思っていた。

思っていたが、アスランの話では、彼女の方が自分を見限ったのだ
と言う話だったはずだ。

「アスランの子供かぁ・・・アイツ、喜ぶだろうなあ。」
ぼそりと零した言葉に子供達が声をあげる。

「あの男は、ボク達を墮胎させるためにお金を払うような人なんじ
やないの？」

墮胎という言葉をこんな年端も行かない子供から聞かされてニコラ
スはギョツとした。

何かが大きく違っていることは確かだとニコラスは子供達と視線を
合わせた。

つづく

現在「8」

ボク達がまだ幼稚園の頃、家族には、お母さんとお祖父ちゃん、お祖母ちゃんがいて、働くお母さんの変わりにお祖母ちゃんがボク達の相手をよくしてくれた。

言葉を発するのは遅かったボク達だけど、大人が話している内容は何となく分かっていて、その内容について、2人でこそそと話をしていた。

「あらあら、また2人でお喋り？お祖母ちゃんも中に入れて欲しいわ。」

お喋りと言ってもアーサーとは言葉にしなくても通じ合うことが出来たから、周囲の大人達にとっては、2人で見詰め合ってるようにしか見えないみたいだったけど、ボク達は本当によく話をしていました。

自分で言うのも何だけど、ボクとアーサーは、天使みたいだと言われる。

座っているだけなのに、皆の顔がふにやあつてなるみたいだ。

癒されるって言われるせいか、よく内緒事とか秘密とかを打ち明ける人が多かった。

そんなある日、近所のお婆さんが、遊びに来た。

リンダお婆さんは、お祖母ちゃんの幼馴染で、齒に衣着せぬ言いよすが面白い人だった。

「それにしても、エヴァちゃんの相手は、こんな可愛い子を捨てるなんてどう言うつもりなのかしら。」

ああ、お父さんって人はボク達を捨てたんだ。

ボク達が会話を理解できてるとは思ってないんだろうなってルークと目を合わせた。

「しょうがないわよ、相手は私達とは全然違う世界の人よ？」

「・・・マグリット、もしかして、あんたまだ？」

お祖母ちゃんの笑顔が少し悲しく見えた。

「伯爵家の人は、あんたに優しくかったんじゃないの？」

「とても、優しくったわ。」

「あんたを騙した男が貴族だったのは偶然よ？今の時代に、身分や階級にこだわらずすぎるのはよくないわ。」

お祖母ちゃんはため息を吐いた。

「分かつてはいても、あの時受けた傷は、消えないのよ・・・お嬢様がどれだけ庇ってくれても相手を逆なでするだけだった。だから、あの子がアスラン坊ちゃんに惹かれていくのを見て、いけないって思っただの。アスラン坊ちゃんはとっても優しい子だけど、あの容姿でしょ？人気がありすぎて、あの子に対するヤツカミというのが凄かったのよ。特に高校に入ってから攻撃は見られないほどだったわ。」

お祖母ちゃんがボクの頭を撫でた。

「アスラン坊ちゃんが庇えば庇うほど、あの子が受ける怪我が増えてきて・・・。肋骨を折って帰ってきたこともあったの。」

お祖母ちゃんの言葉にリンダお婆ちゃんが声を上げる。

「なんてこと！ちゃんと訴えたんでしょうね！！」

「我慢させてしまったの・・・様子が可笑しいって思ったんだけど、あの子、病院にはガンとして行かなくて。数日後にやっと連れて行ってね・・・その時はまさか突き飛ばされて負った怪我なんて思わなくて。こけてぶつけたって言葉を鵜呑みにしてしまった。学校の子が教えてくれなきゃ、分からなかったわ。」

「勉強ばかりして、人付き合いが苦手な子になってしまったのも私に似たんだと思うけど、ある頃からパタってあの子に対する風当たりが弱まってね、アスラン坊ちゃんのガールフレンドが間に入ってくれたみたい。ホツとしたわ。坊ちゃんのこと諦めたのか話題になくなったから、安心してたのに、まさかねえ・・・。」

「この子達は天使よ？」

「ええ、アスラン坊ちゃんがいなきゃ、この子達は生まれてこなかった。それほどエヴァの妊娠、出産には驚きはあっても、怒りはなかったんだけど、生まれてきたこの子達を見て、ぎよっとしたわ。」
リンダお婆ちゃんもため息を吐く。

「あまりにもアイザック家の血が現れた容姿でしょ？咄嗟に思ったことが、相手がいるくせに、うちの子に何で手を出したんだって！手切れ金をその相手が持つてきたのよ？信じられる？いくら相手が貴族で、お金持ちで法律に長けてても、ここまで蔑ろにされる言われはないって、夫とも話して、エヴァにアスラン坊ちゃんと直に会って話しなさいって言ったんだけどねえ……。あの伯爵家の子供だもの、悪い子ではないって思ってたんだけど……。」
ボクとルークは2人のお喋りについて随分話をした。
結果、母さんは、父さんと別れて正解だと思った。

先日リサって女に会って、印象は最悪だった。

臭いし、何より言い方が母さんを貶めているようにしか思えなかった。
ん〜。

とりあえず、父さんって人に会いたくなかった。

一方からの意見だけを聞くのは駄目だと思ったから。

ニコラスって人と会ってしまったのは予想外だったけど、どうやら協力してくれるらしい。

「あいつは、忙しいからな。今は日本にいるはずだ。でも、明後日には帰ってくるから、一緒に空港に迎えに行こうか。」
そう言ってくれた。

「ま、その前にお前達のお母さん、エヴァちゃんに会わせてくれる？色々と確認せなきゃなんないこともあるからさ。」

さっきまで浮気で形勢はボク達のほうが強かったのに母さんを出されると駄目だった。

「アスランとリサに聞いて尋ねてきたってことにするからな。」
ニコラスと会って話をするこゝとで母さんがどう思うか、考えている
のか分かるなら……。

つづく

現在「8」（後書き）

父との対決？は持ち越し。

現在「9」（前書き）

父子対決は保留

現在「9」

いつもの朝。

子供と私のための朝食を作る。

彼等の好きなフルーツも忘れない食卓は今日も賑やかに始まった。

田舎から出てきて早、2週間は過ぎた。

子供と言うのは順応が早いと本当に思う。

祖父母がいて、穏やかだった田舎の生活は忘れてしまっているようだ。

このロンドンの空気を吸っていると、アスランとの過去を思い出してしまう。

リサが居なければきっと私の心は壊れていた青春時代。

彼のことが好きで、でも好きになってはいけないんだと思っていた。だって、彼は私の唯一の親友リサの彼氏。

もし、リサがいなかったら、幼い頃のように素直な心で彼に向かい合っていただろうか。

「イヤだわ、私ったら。」

仮定の話にしても仕方ないわね。

年頃になると母さんは、私と彼が近づくのをよしとしなかった。

母さんの時代とは違う。

アスランは、身分なんか気にしない人だと何回も言ったけど、母さんが語る昔話を聞いていると悲しくなっただけで友達以上の仲になることに反対する気持ちも分かった。

彼が私にした行為の本当の意味は分からない。

ただ、この子達を授かったことは私にとって幸せなことだと思う。アスランに似ている顔、仕草。

見ていると辛い時もあるけど、後悔なんてしていない。

リサから手切れ金として渡されたお金もちゃんと返さなきゃ。

貰っておけばいいのよと彼女は言ったけど、これは私のプライドだった。

私が思っていたアスランと実際の彼との差。優しい言葉を信じていたら、突き落とされる。

その繰り返しとギャップを慰めてくれたのもリサだ。

アスランはどうしてそんなことができるのかと思うほど冷たい印象を私に与える時がある。

あの優しかったアスランは、遠い過去なんだと今更ながら思ってしまった。

いつからだろう、2人の関係がおかしくなったのは。

何度も彼と向き合おうとして避けられていることに気付いた。

私の方を見ない彼、向き合っても口元を隠して感情を抑えているようだった。

彼に嫌われていると感じたのに、彼は卒業パーティーに誘ってくれたんだ。

嘘みたいに嬉しい夜だった。

リサが怒っているのは分かったけど、最初で最後のわがままだからゆるして欲しいと言おうとしたら、リサがアスランに頼んでくれたことだった。

好きじゃなくても男は女を抱けるんだと思ったのもそのパーティーの後だった。

彼は変わってしまった。

変貌は、アスランに愛する人が出来た頃と重なった。

そう思うのは、私の嫉妬心だろうか。

昔を思い、ジュニアハイスクール時代の彼とリサの姿が頭をよぎった。

苛めから助けってくれたリサはいい人だと思う。

だから、彼の心が変わってしまったのなら、それは彼のせい、リ

サには関係ないことだ。

それなのに、彼女は私のために泣いてくれるんだ。いつも優しく。

目を引く美人のリサは、私とアスランの仲が修復不能になっても私の親友として連絡をくれた。

私の代わりに泣いてくれたもした。

「エヴァに酷いことをしたアスランを許せないの。けれど、愛してるの……。許して、エヴァ。」

涙ながらの彼女の告白を私は受け止めたんだ。

アスランは酷い男だった。

それでいい。

そう、それで。

つづく

現在「10」

手切れ金を持ってきたリサが田舎にやって来た時、生まれる子を彼女が私の代わりに育てると言い出した時は驚いた。

「子供には、両親が揃っている方がいいと私は思うの。」
「そう言われた時の胸の痛み。」

でも渡すわけにはいかなかった。

この子達は私の命だもの。

それはできないと言った時の彼女の顔を思い出す。

悲しみと憎しみの混じったような顔。

憎まれても仕方ないことを私はしてしまった。

その後暫くりサは連絡をくれなかったし、私もしなかった。

「母さん？」

声を掛けられて我に返った。

目を向けると不安そうな子供達。

だめ、だめ。

この子達に心配なんかさせちゃ駄目。

「何？アーサー。」

双子のこの子達を一度で見分けることが出来るのはきっと私だけ。
それが私の自慢だ。

「お客さんみたいだよ。」

休日の朝に尋ねてくる人なんかいたかしら？

扉を開けると懐かしい顔が立っていた。

「やあ、エヴァちゃん。」

懐かしい声。

「ニ、ニコラス……。ど、どうして。」

彼の近くに居るはずの人。

親友。

そして、彼と同じ人種に違いない人。

「アスランに聞いた。君がこっちに戻ってきてるって。」
私のことなんかあの人が話題に出すかしら。

「アスランに頼まれたの？様子を来て来いって……。」
まさかね、彼には彼の生活があるんだもの。

「ちがう、ちがう。気になったんだ。君は俺達がこっちに帰って来たときには消えてたから。」

ふと戸口に目をやると茶色のショートカットの目を引く女性と双子達と同じ年頃の女の子2人が立っていた。

「覚えてるか？あの頃から付き合ってたジュリアだよ、横にいるのは、俺達の天使。」

よく似ている女の子2人。

「もしかして、双子？」

そう言くと彼の顔がにこつと人懐こい昔に戻っていた。

「まあ、私の子供も双子なのよ！入って、入って！散らかってるけど！」

同じ双子の親だと分かった途端、親しげになってしまった私を呆れてないかしら。

手招きして奥さんと本当に可愛らしい女の子達と彼は家に入ってきた。

女の子の双子って、着るものとか拘ったら楽しそう！！
我ながら暢気だわ。

さて、我が家の双子達は自分以外の双子を見るのは初めてのはず、
どういう反応かしら。

案の定と言うか、突然のニコラス親子の登場に我が家の双子達は
や興奮気味だった。

「同じ顔がある。」

お互いに同じことを言っただけを和ませてくれた。

「……この子達が君の子供？」

ハツとなり、彼と奥さんを見る。

2人は驚いた顔をしていた。

ニコラスは昔から優しくかったけど、ジュリアとはあまり話したことはなかった。

でも話をしていくうちに、彼女はあっさり、きっぱりした好感の持てる人だと思った。

暫く双子を育てる苦勞とかを笑い話を交えて話した後、ジュリアが一番触れて欲しくない所に触れてきた。

「ねえ、エヴァ。こんなことを聞いたら駄目だと分かってるんだけど……。父親はアスランね？」

ジュリアの目は嘘は許さないとやっているようだった。

さすが、夫婦で弁護士をしているだけあって、追求の手は緩めないつもりなのね。

「……やっぱり、分かる？」

「当たり前よ、どれだけ私達がアスランと顔を合わせていると思っっているの？」

少し大袈裟なりアクションの彼女は続けた。

「貴方と会った日から、アスランの様子が変なのは仕方ないとしても、彼からは貴方が子持ちだと言うことは聞いてたけど、……あの子達を自分の子供だっって知らないんじゃないの？」

本当はつきり言う人だわ。

「そうなのね……言うべきよ、ちゃんと一緒に暮すとか、結婚とかは別にしても、彼にも父親の責任は果たささるべきだと思うわ。」

大きなため息が出た。

何度も彼には知らせた。

けれど、返事はなくて、尋ねてきたのはリサだった。

「彼は、子供達に関りたくないってことをハッキリ伝えてきたのよ。手切れ金と一緒に。」

そう述べた私にジュリアは目を見開き、悪態を吐いた。

UJU<

現在「11」

「母さんは、あのリサって女のことを一から十まで信じてる。」

「小さい頃に、唯一優しくしてくれたのがあのリサって女だったから、信頼してるっていうんだけど。ボク達には彼女が胡散臭くてたまらない。」

まだ7歳。

自分の娘達と同じ年頃である彼等が“胡散臭い”などと言う言葉を言うことにニコラスは苦笑した。

「あんな頭の悪そうな女が母さんの親友なんてボク達はイヤなんだ。だから、リサって女とアスランって男がどういう関係で、母さんがアスランって男に連絡を取ろうとしたのは知ってるけど、どうしてあの男は母さんに会おうとしなかったんだろって。」

「母さんほど可愛い人はいないのに。あの男は見る目がないんだって分かってるけど。」

幼いながら母親が何度も彼らのことをアスランに知らせようとしていたことを彼等は知っていたという。

双子達はエヴァが何回も連絡を取ろうとしていた俺達の事務所の連絡先というものをメモしていた。

彼等はそれを見せる。

「ボク達ってさ、かなり小さい頃から大人の言ってる意味が分かってたんだ。だから、母さんやグランマ、グランパが真剣に話をしてる横でルークとよく遊んでるフリして聞き耳立ててた。」

うちの子は天才って訳じゃないけど、夫婦間の真剣な会話は出来たら彼女達のいないところでしょうと思った。

「グランマに言ってたけど、それはリサが教えてくれたアスランへの直通電話の番号だって。一度法律事務所に連絡を入れた時は、アポイントメントがないってことで繋いでもらえなかったらしいんだ。で、相談者を装って電話をした時も結局は取り次いでもらえなかつ

たから、リサって女に教えてもらっただけけど、あの男は出なかつたんだって。留守電ばかりでもう諦めたって。」

「グランマは、一度アスランって男の実家に足を運んで様子を伺ってみただけど、アスランって男もそのお母さんもボク達のことなんか話題にも出さなかったって。向こうが話さないのなら、わざわざ話をすることもないってグランマは思ったらしいよ。」

憤りを通り越して呆れた。

なんだ、エヴァちゃんは連絡を取ろうと頑張ってたのか。

それが、何回も駄目だったから、諦めた・・・と。

それに双子の祖母が訪ねたと言う実家。

アスランがいつか言っただけでなかったか、エヴァの母親が来たって。彼女を辛い目に合わせて申し訳なさ過ぎて話題にも出せず、仕事を理由に早々に席を立つたって。

俺は頭を押さえた。

なんてヘタレなんだ、アスラン。

お前、あれほど法廷では切れるヤツなのに、なんだ？そのエヴァに対する対応の甘さは・・・。

情けなさ過ぎてたまらない。

そついやあ、昔から色濃い沙汰には呆れるほど疎いヤツだったけど。本当の気持ちを伝えることもしてないなんて・・・。

大きなため息に双子もため息を吐く。

「兎に角、ボク達は母さんの味方だから、ニコラスがどっちに付くか知らないけど、邪魔したら只じゃおかないからね！」

これまた幼子とは思えない脅しを受けた俺。

アスラン直通と言う電話番号に目を通す。

頭はよくてもまだ子供、数字は拙い文字で書かれてあった。

けど、これってアスランの携帯の番号でもないし・・・なんの直通だ？

後で掛けてみることにする。

エヴァとアスランの間は確かな愛情という空気が流れていたと思っ
た。

それを本人達が自覚してないことに高校、大学時代は面白がって見
ていたが、別れることになるほどに拗れているとは思っていなかった。
た。

自分はアスランの親友で、彼の情けない悩みも聞いていたが、年頃
の自分としては、親友のことよりもジュリアを手に入れることと勉
学の両立に忙しく、自分のことくらいじっくりと言っただけで
彼等とはあまり関らなかった。

「・・・」

ジュリアと俺の間にリサが波風を立ててきたこともあったな。

あれほどあからさまにアスランとエヴァの間に入ってきて、彼女面
をしていたくせに、少しアスランに冷たくされると自分に粉を掛け
てきた。

その経緯を知っているジュリアはリサが大嫌い、就職してまで一
緒の場所に彼女がいることが信じられなかった。

「いつか追い出してやる。最近になってやっとアスランがあの子の
無能さに呆れてきたから。」

そう、アスランの秘書をしているリサだけど、基本アスランは秘書
を必要としない。

自分で何でもしてしまうからリサにとっては本当仕事なんて電話番
だけだったんだ。

近頃の彼女は注意力が以前より散漫で、アスランの大事な仕事の電
話を取りつがなかった。

あの時のアスランの珍しいまでの怒り心頭状態にリサは震え上がっ
て事務所を出て行ったんだ。

っていうかまだ仕事の時間だってーのに、出て行くもんだからアス
ランは余計に怒ってたな。

もう、辞めさせるって。

ん？

彼女の仕事は何だった？

名前だけのアスラン秘書。

けど、その実態は？

アスランに関する電話、手紙、メールの管理じゃなかった？

大きく天を仰ぐ。

変なところで知恵の働く女だったはずだ。

ある意味純情で天然なアスランは、すっかり彼女の手の内だったってことか。

にしても情けなさ過ぎだ。

つづく

現在「12」

「根本的なことを言うわね。」

ジュリアはテーブルに腕を、手を組んで顎を置きジッとエヴァを見た。

「貴方にとってアスランは何？」

「・・・た、只の幼馴染。昔は・・・そりゃ憧れて好きだったけれど・・・、今は違うわ。」

ふむと考えるジュリア。

彼女は、法律事務所内では離婚弁護士として知られている。

「アスランのことを、どの程度知ってる？貴方が知ってる情報を全て教えて。」

有無を言わせないジュリアの言葉にエヴァはどもりながらも答えた。

「ア、アスランは、伯爵家の後継者で・・・幼馴染。両親と双子の弟さん達、そして妹さんがいるわ。」

「それから？」

「勉強が出来て、いつも女の子の憧れの的で・・・彼の家に居候してたから、女の子達からの攻撃が酷かったのを覚えてるわ、ああ、その頃、ベランダから突き落とされて腕の骨を折ったかな。両親には、階段から落ちたって誤魔化した。気付かれてたみたいで、アスランと距離をとるように再三言われて・・・。アスランは変わらなかつたけど・・・彼女が出来て、それから私に対する攻撃は減つたの。ビクビクしていた生活から脱出出来て、勉強が出来るのが嬉しくて・・・アスランのリサには感謝しても仕切れない。」

脳裏にリサのことが浮かんでいるのだろうエヴァに向かってジュリアは叫んだ。

「はい、ちよつと待ったっ！！」

キョトンとするエヴァ。

「アスランと誰が付き合ってるって？」

「えっ？リサよ、リサ。リサ・ホーク私の恩人。骨が折れた時に居合わせて病院に連れて行ってくれたの。その時から彼女は私に親身になってくれて・・・社交的な彼女と私じゃ性格も合わないから、最初はどうしてって思っていたけど・・・アスランの大切な幼馴染だからって・・・。」

顔を見合わせるニコラスとジュリア夫妻は顔を見合わせると盛大なため息を吐いた。

「な、何？」

「えーと、ねえ、エヴァ、子供達のことをアスランに知らせたんですって？」

力強く頷く彼女に首をかしげるニコラス。

「ええ、でも取り次いでも貰えなかった。貴方とは連絡を取るなど言われてるってオペレーターの人に言われたわ。何度か伯爵家に電話しようと思ったけど・・・アスランとリサの仲を壊したくなかったの。だって、二人は婚約しようとしてたんでしょ？彼の気の迷いで出来た子供なんて、欲しがらるわけないもの・・・。」

視線を子供たちのいるテレビの方に向ける。

4人も子供がいる割には静かな空間だった。

ニコラスとジュリアの子供達は、二人でままごとをしているし、ルークとアーサーは親たちの会話に聞き耳を立てていた。

「リサが教えてくれたアスランの気持ちを感じることが最初は出来なかった。けど・・・リサが余りにも真剣な顔で言うてくるし、手渡された手切れ金の額が尋常じゃなかったから・・・ああ、本気で私のことは過去でもないことにしたい、存在すらさせたくないんだなって。でも、わざとじゃないの。ロンドンに来ることになったのも、彼が理事をしている学園に勤めることになってしまったことだから、誤解しないで・・・リサは心配してたから、大丈夫だって伝えて欲しいの。そのうち、アスランとリサが結婚でもして、子供でも出来たら・・・いいと思う。」

矢継ぎ早になっちゃってしまうのは、自分の本心を見抜かれないから。

ジュリアは注意深く彼女を見つめていた。

「ほとんど話をしたこともない私の言うことを貴方がどれだけ信じ
てくれるか分からないけど、アスランはそんなに不誠実な男かしら
？・・・情けない男ではあるけど。それに、リサって本当に貴方が
思ってるほどの信頼を寄せられる人？」

「えっ？」

エヴァの頭の中で警鐘が鳴っていた。

「ねえ、君達一緒に2階で遊ばない？」

ルークは双子の女の子達に声をかけた。

ままごとをしていた女の子達はルークを見上げた。

「おい、ルーク・・・母さん達の話聞かないのかよ。」

視線を大人達の方へと向けるルーク。

「ん・・・いいんじゃない？リサの正体を告げる役目をニコラス夫
妻がかつてでてくれるっていうんだ。ボク達は本命に逢いにいく機
会じゃない？」

大人達に2階の子供部屋で遊んでると伝えた。

2階には、非常階段に出られる窓があり、子供でも何とか足が届く
のだ。

「だから、君達は内緒にしててね、これはゲームだよ。いつまで黙
って居られるかって言うね。」

双子の姉妹にそう告げると二人はアスランの暮す自宅までの交通費
とプラス を持って窓から外に出て行った。

「いつてらっしゃい。」

何も分かっていない姉妹に手を振る。

「いい？黙っててね。」

頷く双子。

ルークとアーサーは非常階段を折りきると一目散にバス停へと向か
って走っていた。

UJU

現在「13」

流れる街並みを横目に双子は思案顔だった。

ニコラスと話してみても自分達が今まで抱いていた父親アスランに対する考えが揺らいだからだ。

今日ニコラスと一緒に来ていた双子の女の子達も

『アスランおじちゃんは、優しいよ。』
と言っていた。

他人の子には優しくても自分の子には冷たい男なんだと考えを変えようと思っても、心の何処かで求める父親という存在が、自分達を揺さぶっていた。

「ルーク、ボクね。田舎に居る時さ、どうしてボク達には父さんがいないんだろうつて、思ってた。」

「うん、母さんには聞けなかったね。」
同じ年頃の子供達が父親に甘えて肩車やサッカーをしているのを見ると胸の奥がキュンと痛んだ。

痛んだけれど、エヴァや祖父母が懸命に父親の代わりとして頑張ってくれてたのも知っている。

彼女達の行為が決して無理矢理ではないことも理解してたし、一緒に遊んでくれることは本当に嬉しかった。

「じいちゃんは、ちよつと無理してたよね。」

田舎でのんびり暮していた祖父母。

特に祖父は余り体が丈夫ではなかった。

二人はため息を吐く。

「兎に角、会ってあいつの気持ちとか確かめよ?」

「うん、ボク達のことをイヤでも、母さんには謝らせよ?」

指定の停留所で降りた双子は、地図を片手に歩いた。

ロンドンの少し郊外。

一軒一軒の間が広い。

長い岩壁を伝って歩いていくと大きな門が見えた。門の前には、人が立っている。

「見張りがいるね、」
入れてもらえるか。

自分の父親とされる人の実家がこれほど大きいとは思っていなかった二人。

とりあえず勇気を出して門番の大男に声をかけた。

「あの……。」

見下ろす男は、銀髪の天使のような男の子二人に目を丸くした。

「伯爵はいますか？」

「今日はお仕事はお休みだと伺ったんです。」

子供らしからぬ丁寧な言葉で尋ねる。

「伯爵？アスラン様かい？」

そう尋ねた男は、双子が家の主であるアスランによく似ていることにドキドキした。

「うん、ボク達、その人の子供らしいんだ。」

時折、アスランに会わせると屋敷に乗り込もうとする女は何人も居た。

事実無根だが、子供が出来たとか色々な理由を述べて。

そのほとんどは彼女達の勘違い、妄想の賜物で、仕事で彼の手腕にやり込められた者の関係者が八つ当たりの的にやってくることもあった。

しかし、子供がそんなことを言ってくるとは。

キラキラ光る子供の目には一点の曇りもない。

かといって、ここをすんなり通すわけにも行かなかった。

ブッブー！

車のクラクションが鳴った。

門番はハツとなり、前方を見た。

そこには、黒と青色のミニクーパー。

「どうしたの？エリック。」

優しい声がかかった。

運転手側の車窓を開けて顔を覗かせたのは、プラチナブロンドの美人だった。

年齢は祖母と同じ頃だろうが、随分と若く双子の目には映っていた。

「いえ、あ、あの……。」

駆け寄って夫人に子供たちのことを伝えるエリック。

「何ですって？またなの？」

呆れた口調の夫人ではあったが、身を乗り出して目にした双子の姿に呆然としていた。

「……なるほど、あれじゃあ、エリックが焦るのも無理ないわね。アスランの子供時代にそっくりなもの。」

夫人は車から降りて双子の前にしゃがんだ。

「こんにちは。」

「「こんにちは。」」

ジッと見つめてくる夫人。

双子は自然と手を握り合っていた。

「貴方達、私の親友に何処か似てるわね……。」

すっかり会うこともなくなってしまうた愛しい友が夫人の脳裏に浮かんだ。

彼女もこんな緑の瞳をしていた。

「ボクは、ルーク。」

「ボクは、アーサー……アーサー・アグリット。」

苗字を口に舌途端、夫人の目が真剣な色合いを見せていた。

「ボク達は、エヴァンローズ・アグリットの子供です。」

「父親は、たぶん、貴方の息子さんです。」

言葉が終わった途端、夫人は彼らを抱きしめた。

「な、何てこと！何て事なの！！孫が、孫がいたなんてっ！！エリック！主人に連絡して頂戴！今日はアスランとポロに行っているはずなの！もちろん、アスランもよ。この子達のことはまだ伏せて頂戴。」

早口で命令を下した夫人は、少々呆気に取られている双子を尻目に、車のドアを開けて中へと促した。

「ルーク、アーサーどうぞ。」

この人には歓迎されているらしい。

けれど、父親と祖父はどうだろう。

双子は僅かな期待と絶望への心構えを抱きながら車に乗り込んだ。

つづく

現在「14」

目の前に居るのは銀髪の男二人。

一人は硬直していて、身動きも出来ず、目も見開いたままだ。そして朗らかに笑っている夫人。

この部屋全員が眩しいほどの容姿をしていた。

ルークとアーサーはアスランと言う男を目の前にして、改めて自分達が彼に似ているのだと分かってため息を吐いた。

「エヴァの・・・子供。」

やっとならした言葉。

双子はその言葉にカチンときた。

「そうです。そして、ボク達は貴方の遺伝子も持っているはずだ。」

「もし、疑うなら、色んな検査を試してみたらいい。」

睨みつけられてアスランは真つ青な顔になっていた。

「突然現れた息子に驚いているの？」

「そりゃ驚くよね、お父さんは、ボク達を殺したと、もうこの世には居ないはずだって思っていたんでしょ？」

迎えに座る3人の目がギョツとした。

「ボク達知ってるんだ。お父さんが、ボク達を邪魔だって思ったこと。」

「お腹に居たボク達を殺すためのお金を母さんに渡していたこと。」

衝撃的な子供の言葉。

祖父母は険しい顔で息子を睨んだ。

「ア、アスラン！この子達の言ったことの説明をしろ！」

「そうよ！私達に内緒で孫の命を奪おうとしたなんてっ！嘘よね？」
揺さぶられる体。

アスランは我に返った。

「君達は、俺の子供？エヴァと田舎の男との間に生まれた子供じゃない？」

これほどまで瓜二つな子供を前にアスランは必死に考えをまとめようとしていた。

「どういうこと!」

アスランはリサからエヴァの妊娠、そして結婚を聞いていた。

彼女は自分以外の男と結婚して妊娠したのだと。

だから、少しでも彼女の助けになればと祝い金を渡した。

「幸せになってくれってメッセージも託した。」

「また、リサ!」

夫人は夫を睨んだ。

「待て、待て。俺を睨むな。アスラン。お前・・・エヴァに対して、精一杯のことをしたのか? かつこ悪くても彼女を追いかけて彼女に逢いに行こうとは思わなかったのか?」

父親の言葉にアスランは言葉もない。

逢いに行こうと思えば逢いに行くことはできた。

それをしなかった自分。

彼女の気持ちを直に確かめなかったのも自分だ。

「母さんは、リサって人を心から信頼してる。それは、苛められて

苦しかった時に唯一手を差し伸べてくれた人だから。」

「でもボク達は実際の彼女を見て思った。彼女は信頼できないって。」

┌

双子の言い切り。

アスランは頭を抱えていた。

「どういうことだ? 何故・・・何故・・・。」

双子は母親がアスランに連絡を試みたが、取り次いでも貰えなかったことを語った。

「何回かチャレンジして、母さんは諦めた。」

「父さんは、どれだけ母さんにチャレンジしたの?」

シヨックが強すぎたのか、アスランは言葉も出なかった。

「・・・アスラン?」

尋ねる母親。

彼はゆっくりと頭を上げた。

「リサを呼ぶ。できれば、その場にエヴァも居て欲しい。来てくれるだろうか。」

双子を見る真剣な眼。

その青さに双子はドキツとした。

「ルークとアーサーと言ったね。俺は君達のことを自分の子供だとは思って居なかった。もし、自分の子供だと分かっていたら責任は取る。金を渡して、子供を墮胎しろなんて、そんなこと脅されたっではない。これだけは信じてくれ。」

立ち上がるアスラン。

その体から放たれるオーラに子供達は息を飲んだ。

「やっぱり、リサって人が原因なの？」

恐る恐る聞いてみたルークにアスランは言った。

「彼女は原因の一つに過ぎない。根本的に悪いのは俺だ。君達にもすまないと思っている。・・・心から。」

彼の大きな手が双子の頭を撫でる。

この手を母親は待っている。

全ての清算をする時がやって来る。

そんな予感がしていた。

t u d u k u

現在「14」（後書き）

都合上小切手は現金に・・・。

現在「15」

思わず立ち上がった。

嘘だと叫んだ。

私を見つめる二人の目が、悲しいくらいに真剣で、言葉の続きが出てこなかった。

「リサは、そ、そんな人じゃない。」

ニコラスが書類を提出した。

「これは、リサが事務所のオペレーターに頼んでいた内容をまとめたもの。リサが見返りに彼女の口座に金を振り込んでいたという証拠。そして、君がアスランのものだと信じていた電話番号、住所がこれ。しかし、この番号はリサが契約した番号に他ならないし、住所はリサの家が持つロンドンの別宅のものだ。」

そのプリントに書かれている内容は何の根拠もないことだった。
・エヴァンローズ・アグリットは、アスラン・アイザックのストーカーである。

・接近禁止命令が出ているにも関わらず、彼に連絡を取ろうとしている。

・偽名を使って電話をかけてくることがあるので注意が必要。○○地区方面からの電話には特に注意が必要。

・彼女からの手紙は必ず、処分するか、リサ・ホークに渡すこと。

・アスラン・アイザックを守るための行為であることを忘れないこと。

・上記のことを遂行して貰えるなら、特別手当てを与える。
震える手は書類を握り潰してしまった。

「オペレーターはリサが自分の恋人を守るために必死に行っていることなんだって思ってたと言っていたわ。アスランとの仲は職場が同じであるが故に、皆には内緒なんだって言って、彼女って弁護士並みに言葉がたくみなのよ。で、これと同じようなことを貴方が過

ごしていた学生寮の寮母にも頼んでいたみたい。ま、これは逆でアスランが貴方のストーカーって事になつていたみたいけど。」

「ジュリアが調べ上げたことを言った。
「ついでに言うと、貴方を学生の時に苛めていた子達にインタビュ
ーしてわかつたんだけど、」

大きなため息と少しの間。

エヴァは聞きたくない和本能的に思っていた。

「苛めを先導していたのは、リサよ。あの子は、貴方を逆恨みして
たの。貴族でもないくせに、アイザック家の庇護を受けて、学校に
も通えて、アスランの心を手に入れて、あまつさえ両親の仲がいい。
自分は満たされていないのに、エヴァが何もかも得て幸せになるの
は許せないってね。」

「嘘よ……。」

「自分のため、自分の特になることなら、手段を選ばない子だつて
言つてたわ。アスランに対しては友人を装つてるけど、彼女こそが
ストーカー。エヴァだけじゃないの。彼に近寄る女の子は皆リサに
排除されてたのよ。」

エヴァは自分の体を抱きしめてしゃがみこんだ。

「彼女は、彼が絡まないと……ま、いけすかない女だけど、まだ
普通。少々仕事が出来なくても、笑って誤魔化される男もいるわ。
彼女の妄執に貴方とアスランはガツツリ混乱させられてたのよ。」
ジュリアの言葉。

ニコラスの示した証拠。

エヴァは、子供たちの名前を呼んだ。

彼らを抱きしめたかった。

未だにリサのことは信じられないが、本当のことであるならば、自
分は子供達から父親を奪つたことになる。

しかし、家の何処にも双子の男の子達はいなかった。

「何処に行った？」

父親に尋ねられて女の子達はニコニコ笑うばかりだ。

「おーい……。」

警察に届けるかどうか、そう思った時、ニコラスが言った。

「もしかして、アスランのところかな？」

「えっ？」

「あの子達は、アスランに真実を確かめるって言ってたんだ。リサは信用できないって言ってね。」

「そ、そんな……。」

ジュリアが優しくエヴァの肩に手を置く。

「母親が信頼している人を疑ってるなんて言えないわ。」

見上げた瞳には涙が溜まっていた。

「私は・・・私は、どうすればいいの？」

ジュリアが目線を合わせる。

「アスランに会いましょう。彼の本心を聞かなきゃ。」

電話のベルが鳴った。

エヴァの代わりに出たニコラスが声をかけた。

「双子は、アスランのところだ。」

ビクッと彼女の体が震えた。

思わずジュリアの手を握る。

「エヴァ、君に来て欲しいって。もし駄目ならアスランがこっちに来るって。んー来てもらおう。リサも呼び出して、決着をつけるんだ。」

フルフルと頭を横に振るエヴァ。

「怖がつてちゃ駄目。子供達のためにも貴方達のためにも。」

深呼吸を数回。

「ニコラス、アスランに来て欲しいと伝えて。子供達を連れて・・・住所は・・・。」

「大丈夫だ。知ってるってさ。」

受話器が静かに置かれた。

UNU

現在「16」

アスランを久しぶりに視界に入れた気がした。

彼に連れられてきたルークとアーサーは私に謝った後、抱きついてきた。

「母さん、ごめんね。ボク達、父さんに会いたかったんだ。」

「父さんが、どんな人なのか、この目で見たかったんだ。」
愛しい子供たち。

私こそごめんなさい。

未だにジュリアやニコラスのいうことは信じられないのが正直な気持ちだった。

彼女がいたから、私は学生生活を送ることができた。

彼女がいたから、皆は私を苛めなくなつたのに……。

アスランと共に来た人には、薄っすらとしか記憶がなかった。

「恐らく、面と向かつて話するのは初めてだと思います。俺はマクシミリアン。リサの命令で貴方とアスランを引き離す工作をしていた者です……。」

語られる彼の言葉。

その言葉を聞く度に心が痛んだ。

やっぱり、嘘だと言いたい。

言いたいののに、言えない状況。

私は、誰を信じたらいいの？

両腕に凭れる双子を抱きしめる。

「母さん、ボク達は、母さんに幸せになってほしいんだ。」

「ルーク。」

「ボク達は、リサが嫌いだ。だから、彼女は信じられない。」

「アーサー。」

二人とも勘のいい子だ。

それ故に息子達の言葉はショックだった。
あの頃の孤独を救ってくれた唯一の存在。
それがリサだった。

マクシミリアン、彼の語るリサは私にとっての彼女とはかけ離れて
いた。

揃えられる証拠。

信じたいのに、信じられない状況へと追い詰められていく。
イヤな汗が止まらない。

「ちよつと、気分転換でもしましょうか。」

ジュリアが席を立ち、紅茶を淹れ直してくれた。
何気なくつけたテレビ。

そのテレビに流れたニュース。

キャスターの言っている言葉なんか耳に入っているはずもなかった
のに、私達はいっせいにテレビに釘付けとなった。

「ホーク子爵が焼身自殺しました。ここ現場には未だに焼け焦げた
臭いが立ち込めています。」

映し出されたのは、アスランの実家。

子爵は彼の家の門前で自殺した。

「なっ、」

突然のことにアスランも私も、誰もかもが動けずに居た。

「子爵は遺書を残しています。その遺書の内容はマスコミ各社に事
前に送られています。この屋敷の主であるアイザック伯爵と何ら
かのトラブルがあったと言うことだけお伝えしておきます。」

彼の携帯が鳴った。

アイザック家からのものだった。

「ああ、見た。どういう事かなんて知らない。一体どうなって・・・
。えっ？遺書の内容？・・・はあっ！？言いがかりも甚だしいっ！」
彼は暫く喋った後電話を切った。

彼が大きなため息を吐いた後、私の方を見て、ニコラスを見た。

「子爵が自殺した原因は、資金難だそうだが、アイザック家が資金提供を断つたためだと言っているそうだ。」

「なんだ、そりゃっ！」

資金援助など申し込まれたこともなかったとアスランは言った。

「しかも、子爵は、俺が娘を誑かし、傷付け、弄んだとそのせいで娘は可笑しくなり、会社の金にまで手を出すようになった。全て俺が悪い。責任を取ってリサと結婚し、自分の会社を立て直す手助けをするのが道理であると遺書には書かれていたそうだ。」

皆言葉を失った。

「な、何？
どうして、そんなことになるの？」

ジュリアが立ち上がる。

「子爵は、とんでもない遺書を残したもね。しかも、自殺する前にマスコミに配っておくなんて。」

「アスランは、ゴシップ誌に騒がれる対称だが、いたって真面目な弁護士で、結婚相手こそ各誌が予想を立てていたが、予想の範囲を過ぎてない程度だった。浮いた話もない。その弁護士初のスキヤンダルだ。騒がしくなるぞ。」

ニコラスが電話をかけた。

皆からの怒りが伝わってくる。

「大丈夫？」

ジュリアが隣に座り座ってきた。

「子爵親子は相当頭が痛い人達のようなね。でも大丈夫、リサがアスランのストーリーカーだって事は証明できるわ。」

「すみませんっ！俺が、もっと早くに止めておけば。」

マクシミリアンが頭を下げた。

皆が言葉を無くした。

「アスランは、私と会うべきよ！」

テレビから声が聞こえてきた。

また、テレビに釘付けになった。

「・・・リサ。」

そこには、怪しい眼光をしたリサが映っていた。

つづく

「では、リサさん。貴方はアスランさんと結婚の約束を？」

「はい、私達は中学校の時に出会い、恋をせずとお互いを認め合い愛し合ってきました。それをあの女が邪魔をして・・・私は優しくして、親友だったと思っていたのに、アスランを誘惑したんです。父が自殺したのだから、アスランがあんな女に言われて資金援助を断った生だつて聞いてます。私達が付き合ってきたこと、結婚の約束をしていたこと、友達に聞いてくれば分かります。」

つらつらと言葉を並べるリサ。

テレビに映っている彼女は常軌を逸した目でカメラを睨みつけている。

彼女の親友と言う女性が同じようにアスランを責めていた。

ああ、彼女は本当におかしいんだ。

その様子に身震いした。

あんな人を親友だと思ってたの？

私は、リサの言葉を信じていた。

信じていたのに・・・。

そつと肩に置かれた手。

不意に顔を上げるとジュリアが優しく微笑んでいた。

「大丈夫、リサのことはアスランが決着をつけるわ。リサは狂ってる。父親の死をあんな簡単に割り切れるなんて・・・。どうかしてらわ、貴方も子供達もきつとアスランは守ってくれる。」

子供達を守るのは私。

あのリサの様子を見てみると彼女は何をするか分からない。

「それと、アスランだけど・・・きつと、リサに何を言われても貴方と話がしたかったと思うの。」

部屋の中には子供達とジュリアだけだった。

「でも、あのリサの常軌を逸した顔付きを見たらまずは、彼女と力

夕を付けてと思ったんじゃない？ニコラスと飛び出していったわ。」
「。。。。。」

ジュリアはニッコリと笑った。

「ところで、今日泊めてもらえないかしら？うちの姫達は完全に落ちてるの。」

そう言えばと周りをみると可愛らしい洋服を着た双子ちゃん達がソファでスヤスヤと寝ていた。

その可愛さに思わず笑顔になってしまふ。

「可愛いでしょ？うちの姫達。貴方の王子達も可愛いけどね。」

気が付けば子供はもう寝る時間だ。

ルークもアーサーも大人びたことを言うけど中身は子供、一生懸命目を開けようとしていた。

「ルーク？アーサー？今日は遅いからもう寝なさい。」

けれど、二人は首を振る。

「やだ、母さんと一緒に居る。」

ほんと、可愛い子供達。

そんな子供達の成長を見ることなくアスランは過ごして。。。。

リサと幸せに暮しているのだと思っていた。

だから、私は彼にとつて邪魔なだけだと思って。。。。

「エヴァ、貴方も寝なさい。今日は疲れてるはずよ。」

ジュリアの気遣いが嬉しかった。

次の日の朝、

アスランはテレビに出ていた。

連日流れる放送に対しての反論だった。

リサが自分に対して長年、ストーリーカーをしていたこと。

事務所のオペレーターの話や、大学寮母の話、そして、マクシミリアンが証言しているVTRが流れた。

一晩でここまで出来るんだと思うほどの証拠をアスランは用意していた。

一番、私を驚かせたのは、アスランが私宛に書いた何通もの手紙が

リサの部屋で見つかったことだった。

「これは、自殺した子爵に会社の金の横領の容疑がかかっていたと言うことで、彼の自宅に検察の捜査が入った時に押収されたモノの中にありました。令嬢の名前とは違う女性宛の手紙が見つかったということ、これだけでも彼女が私に対してストーリーカー行為をしていたのが分かるでしょう。子爵が遺書に残していた文言も虚偽であり、ホーク家はアイザック家に取り入ろうとはしていましたが、資金援助などは一切申し込んでいませんでした。それは、以前ホーク家で執事をしていた者からの証言を得ていますし、実際、私も父も彼とはビジネスの話はしたことがありません。」

アスランは、子爵が何かと自分とリサを結婚させようとしていたことは知っていたが、相手にしなかったこと。

自分の愚かな行為で傷付き去っていった恋人を未だに愛していることを全国に向けて言っただけのこと。

それって、私のことだと思っただけなの？

更にアスランは続けた。

ストーリーカーとまではいかないが、しつこいリサに嫌気がさしていたアスランは、仕事でも私生活でも彼女を無視することにした。

それで事は解決すると思っただけだが、相手にしていなかったことが原因で彼女が悪質な嫌がらせを自分ではなくある女性にしていたことが判明した。

その女性は自分が心から愛している女性で、守りたい女性だったが、自分の情けなさとりサの狡猾さに阻まれて傷付けてしまったこと。全てを正直に話しているように思えた。

「そろそろアスランが来ると思うの。だから、お邪魔虫は帰るわね。」

「ジュリアは双子ちゃん達を連れて帰っていった。」

私はテレビの前で呆然としている。

そんな私の側にはルークとアーサー……。

「母さん、大丈夫？」

見上げる双子を抱きしめる。

「母さん、アスランと仲直りする？」

「そうね、色々誤解していたけど、仲直りはできる気がするわ。」

「じゃ、結婚は？」

言われて戸惑う。

今更な気はする。

けど、父と子を離して過ごさせることはできない。

「母さんの気持ちは？」

「アスランを愛してる？」

私は……。

考え込んでいた私達の静寂に蹴り破られるドアの音が響いた。

つづく

現在「18」

険しい形相をして入ってきたのはリサだった。
手にはナイフ。

私は咄嗟に双子を背に隠した。

「2階に行きなさい。」

できるだけ落ち着いた声で言う。

けれど、双子達はそろって首を振り、イヤだと言った。

「お願いだから、2階に……。」

目の前のリサの目は完全に狂っていた。

「どうして？どうして、私とアスランの仲を邪魔するの？あれだけ妨害したのに、どうして今になって、また距離を縮めるの？」
リサはつらつらと自分がしてきたことを述べていた。

心のほんの片隅で彼女を信じたいと思っていた心は砕け散った。

「その子達は、私とアスランの子供なのに、どうして、エヴァが育ててるのよ！」

後にいる双子がギョツと服を掴んでくる。

「リサ、落ち着いて……何か混乱してるのよね。」

「私は正気よ。どうして、私とアスランの幸せをあんたなんか奪うの？お金も地位もない、ブスのくせに、どうやってアスランを誑かしたの？処女でもチラつかせた？彼を一瞬でもあんたなんかに貸すんじゃないかった。」

彼女が横に振った手が置いてあった花瓶に当り砕けた。

「アスランは、私の男なの。アスランが居ないとホーク家はお仕舞い。お父様が言ってたの、リサには暖かい家庭を与えてやれなかったけど、アスランはリサのもの。アスランとなら幸せな家庭が築けるよって、だから、アスランは私のものなの！」

私は、じりじりと彼女との距離を保ちながら、双子を奥の部屋へと押しやり、ドアを閉めた。

「母さんっ！」

ブツブツ言っているリサは、私に時間をくれた。

ドアにつつかえをして、子供たちが出てこれないようにした。

「リサ、貴方はおかしくなってる。こんなことしちゃいけない。」

「私は何処もおかしくなんかないっ！あんたさえいなければ、何もかも私のものだったのに！」

飛び掛ってきたリサを避けて床に倒れた。

彼女も勢いに押されて倒れたけど、物凄い勢いで立ち上がってきた。子供達を守らなきゃ。

「リサ、話し合いましょう。」

子供達が入っている部屋から遠ざけなきゃ。

じりじりと距離と詰めさせて、逃げる。

家具に躓きながらも狭い部屋を逃げた。

けれど、私はダイニングのテーブルに足を捕られてしまった。

「死ねえ〜！！」

背中に感じる彼女の怒号。

けれど、覚悟した痛みは襲ってこない。

瞑っていた目を開けると影になっていて、振り仰ぐとそこには、銀色の髪をした彼が立っていた。

「ア、アスラン・・・どうして・・・？」

掠れたリサの声。外では警察のサイレンが聞こえてきた。

「リサ、いい加減にしろ！現実を見ろ！！」

ポタポタと床に落ちる赤い液体。

ハッとなり体を起こす。

アスランは、リサのナイフの刃を握っていた。

どかどかと入ってくる警察。

彼女は、最後の抵抗とばかりに叫び声を上げながら連行されていた。

「エヴァ、怪我は？」

振り返った彼が床にナイフを投げる。

私のことより、アスランが……。

「俺は大丈夫、かすり傷だ。子供たちも無事か？」
ドンドンとドアを叩く音。

警察の人が椅子をどかして開けてくれた。

「母さんっ！」

双子は駆けてきた。

子供らしい泣きべそを浮かべた彼らを抱きしめた。

「母さんのバカっ！」

ステレオで怒られた。

ごめんね、でも母さんはお前達を守りたかったの。

「アスラン……怪我したの？」

ルークの声に我に返った。

私はアスランの手をタオルでグルグル巻きにした。

「これは、母さんを守ってつけた傷？」

「……ああ、そうだ。」

交互に私とアスランを見ないで。

「テレビで言ってたことは本当？」

「本当だ。」

「アーサー！……救急車を呼ぶわね。」

立ち上がる私を彼の手が捕まえる。

「大丈夫だ、そんなに深くない。」

バカ、そんなわけないでしょっ！

「俺が情けなかったばかりに君を傷付けて、一人で産ませてしまっ

た。許してくれなくていい。ただ、君を愛し続けること、子供達の

父親としての義務を果たすことだけは許可をくれ。」

青い瞳がそこにあっただ。

昔から恋焦がれていた瞳。

「父さんも母さんもいた、田舎の人達も助けてくれたもの、一人じ

やなかつたわ。」

我ながら素直じゃないと思う。

けど……。

「分かつてる。オバサンが来た時に君の事を尋ねもせずにも悔やんでたんだ……。」

彼は今、素直な心を私に示してくれている。

私も答えなきやいけないんじゃないの？エヴァンローズ！

「あ、貴方がいなくて淋しかった。悲しかった。けれど、リサのために会つちやいけないって……子供のことを知らせた手紙にも返事はなかったし……。」

二人してリサに言いように踊らされた。

もつと素直に心を打ち明けていれば、リサに付け入られることもなかった気がする。

「あと、7年。」

ふいに聞こえてきた子供の声。

「ボク達が生まれて今まで7年、今から同じ分だけずっと変わらぬ気持ちで居られるなら、母さんと結婚していいよ。」

「ルーク……！」

突然の言葉にオロオロしているとアスランは双子に笑いかけた。

「7年？そうしたら、俺は君達の父親になれるのか？」

「アスラン、本気にしないで。私の気持ちは何も決まってないのよ。」

「それでも、俺はアーサーとルークの父親に、君の夫に……いつ

かなれたらと思ってる……。」

彼の本気が心を揺さぶる。

色々あった、お互いに悪いところがいっぱいあった。

そのせいで、この子達を心配させてしまった。

「私も、いつか……そうなれたらと思うわ。」

今はこれが精一杯の答え。

それでも彼は笑ってくれた、昔の頃のように。

o
w
a
r
i

現在「18」（後書き）

いたらぬ作者に加えて、いたらぬ主人公二人。
こんなヘタレな二人になるとは思ってた連載当初。
紆余曲折ありましたが、これが精一杯です。
沢山の御意見、御感想を頂きました。
ほんまに嬉しかったです。
ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2599u/>

素直な心で

2011年9月1日01時45分発行